

福岡市埋蔵文化財年報

VOL.26

— 平成23(2011)年度版 —



2012

福岡市教育委員会

序

福岡市では、文化財保護法の趣旨に基づき、埋蔵文化財の適切な保存と活用を図ることを目的として、公共及び民間の各種開発事業の事前審査、記録保存のための緊急調査、また重要遺跡確認調査等を実施しております。

本書は、平成23年度における埋蔵文化財保護行政の概要を報告するものです。開発事業に起因する緊急調査件数は、平成13年度から平成16年度をピークに増加に転じましたが、平成17年以降21年度まで、毎年減少を続け、以降、底を打って横ばい状況が続いています。一方、事前審査件数は逆に増加に転じ21年をピークに高水準状況が続く、相反する動きを示しています。一件あたりの規模は、民間、公回事業を問わず小規模化しており、景気を反映し、小規模開発が増加しております。今後とも埋蔵文化財保護行政について適正で迅速な対応を進めたいと思います。

本書が文化財保護に対するご理解の一助となり、また学術資料として活用いただければ幸いです。

平成25年3月22日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例 言

- ・本書は、埋蔵文化財第1課（現埋蔵文化財審査課）、埋蔵文化財第2課（現埋蔵文化財調査課）、文化財整備課（現文化財保護課、大規模史跡整備推進課）が平成23年度に実施した各種開発事業に伴う事前審査と発掘調査の概要及び本報告、ならびに新指定文化財の概要について収録したものである。
- ・本書に記載ある23年度調査のうち、調査番号1108,1124,1144,1147調査は、この年報をもって本報告とする。その他、本年度、本報告書が刊行される調査については調査概要は削除した。
- ・Vの各調査の概要及び調査報告は各調査担当者が分担執筆した。VIについては文化財整備課（水野哲雄）が執筆した。
- ・上記以外の執筆並びに本書の編集は加藤良彦が担当した。

表紙写真：元岡・桑原遺跡群第56次（元岡古墳群G6号墳）現地説明会風景と出土「庚寅」銘象嵌大刀

目 次

I	平成23年度文化財部の組織と分掌事務	2
II	開発事前審査	3
III	発掘調査	6
IV	公開活動	6
V	平成23年度発掘調査概要および報告	10
VI	平成23年度新指定文化財	52
	報告書抄録	59

I 平成23年度文化財部の組織と分掌事務

文化財部の組織と分掌事務

文化財部 52

文化財整備化 13

- 運用係（事4・文1） 部の総括、文化財施設の管理
- 主査（文1） 文化財行政企画担当
- 主査（文1） 歴史町づくり推進事業担当
- 整備第1係（文3） 文化財指定、史跡の指定・保存・整備
- 整備第2係（文2） 福岡城及び鴻臚館跡の調査・整備

課長（学1） 2

- (学1) 文化財調査等

埋蔵文化財第1課 8

- 事前審査係（文3） 公共及び民間開発事業に係る事前審査
- 主任文化財主事（文1）
- 管理係（事3） 課の庶務・第1・2課の予算・決算

埋蔵文化財第2課 21

- 調査第1係（文6） 課の庶務・東部地区の埋蔵文化財の発掘調査及び保存
- 主任文化財主事（文4）
- 調査第2係（文6） 国庫補助事業総括・西部地区に係る埋蔵文化財の発掘調査及び保存
- 主任文化財主事（文3）
- 主査（文1） 今宿古墳群保存担当

埋蔵文化財センター 7

- 運営係（文3事2） 施設の管理運営、考古学的資料の収集・保存・展示
- 主任文化財主事（文1）

事：事務職 文：文化財専門職 学：文化学芸職

埋蔵文化財第1、2課の職員構成（第1課管理係は事務職。他は文化財専門職）

◇埋蔵文化財第1課長	濱石哲也	◇埋蔵文化財第2課長	田中壽夫
管理係長	和田安之	調査第1係長	米倉秀紀
係員	古賀とも子 井上幸江	係員（文化財主事）	大塚紀宜 藏富士寛 阿部泰之 松尾奈緒子 比嘉えりか
事前審査係長	宮井善朗	主任文化財主事	小林義彦 吉留秀敏 佐藤一郎 屋山洋
係員（文化財主事）	木下博文 今井隆博	調査第2係長	菅波正人
主任文化財主事	加藤良彦	係員（文化財主事）	瀧本正志 森本幹彦 板倉有大 福嶌美由紀 松村道博
		主任文化財主事	荒牧宏行 長家伸 榎本義嗣
		主査（今宿古墳群担当）	杉山富雄

II 開発事前審査

1. 概要

本市では、土木工事等の各種開発事業に係る埋蔵文化財の取り扱いについて、開発事業計画地における埋蔵文化財の有無を確認した上で、保存に係わる協議等を行っている。

公共事業については、関係機関・部局に次年度の事業計画の照会を行い、埋蔵文化財の保存上問題になると判断される事業についてはその取り扱いについて協議を行っている。

民間の開発事業については、都市計画法に基づく1,000m²以上の開発事業、建築基準法に基づく建築事業等を対象として事前協議を求めている。また建築等の計画策定段階での照会にも窓口やファックスで応じ、埋蔵文化財の保存上の措置について必要な指示を行っている。

2. 平成23年度の事前審査

平成23年度の開発事業等に伴う事前審査件数は、表1のとおりである。昨年度に比べて公共事業、民間事業ともに微減した。東日本大震災の影響が、景気の回復にかけりをみせると考えられたが、大きな変動とはなっていない。

申請内容

公共事業に伴う依頼191件は横ばい状態。内訳は表3のとおりである。事業者別では、国機関2件(1%)、福岡県5件(2%)、福岡市183件(96%)、その他1件(1%)、郵便事業株式会社各1件*であり、福岡市各部局事業が15件増加し、国、県関係の事業は1/3以下に激減している。事業別では水道・電気等79件(41.4%)、道路49件(25.7%)、学校関係11件(5.8%)、公園8件(4.2%)、空港関係1(0.5%)、河川3件(1.6%)、住宅を含めた建物12件(6.3%)、そのほかの開発が18件(9.4%)で、学校・公園・空港関係が減少し、バス停改築の増加でそのほかの開発が3倍に増えている。また、公有財産の売却や、これに関連した所管換え、物納物件等の土地調査にかかる事前審査依頼は10件(5.2%)、空港関係は滑走路中心線灯1件のみであった。事業照会1,181件も横ばい状態。事業別内訳は上下水道771件(65%)、道路218件(18%)で微増、住宅を含めた建物75件(6%)が留守家庭子ども会施設改築27件を含め学校53件(5%)を上回った。以下、公園25件(2%)、と続き、増加の傾向を見ていた空港は8件(0.7%)であった。

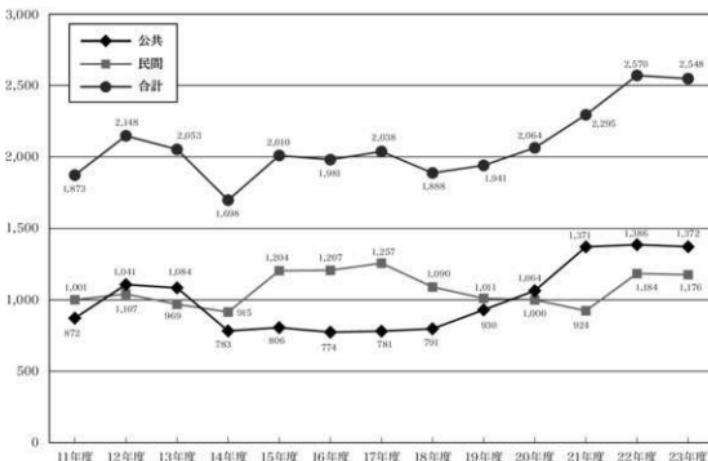
民間事業1,176件の届出内容は、届出者別に見ると個人457件(39%)、一般企業396件(34%)、個人事業者265件(23%)、法人等の民間事業者58件(4%)となっている。前年に比べ個人専用住宅が10%減少、法人は微増、個人事業は8%増加で、専用住宅の買い控えと小規模開発の増加が目立つ。事業別では個人住宅512件(44%)、共同住宅174件(15%)、戸建住宅や宅地造成など他の住宅関連事業186件をあわせると872件全体の74%で前年と変わらない。住宅以外の事業としてはその他の建物(事務所、診療所、福祉施設、倉庫等)126件(11%)で4%増。このうち27件が老人福祉関連である。土地売買に伴う審査依頼は75件(6%)、看板・アンテナ等のその他の開発44件(4%)、店舗35件(3%)となっている。区画整理計画地の事前の調査依頼は11件あった。区分に見ると早良区255件(22%)、博多区240件(20%)、西区204件(17%)で前年の順位と変わりないが、東区で35件35%増、中央区で9件64%増、一方城南区16件10%減、西区36件15%減が目立つ。

* 政令で定める国の機関等(法94条対応)に該当。

表1 平成12~23年度事前審査件数推移

事業	内訳	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
公共	事業組合審査件数	1,107	1,084	783	671	662	668	665	769	862	1,143	1,191	1,181
	申請件数				135	112	113	133	161	202	228	195	191
	審査件数計	1,107	1,084	783	806	774	781	798	930	1,064	1,371	1,386	1,372
民間	窓口照会件数	3,597	4,540	4,662	4,292	5,842	6,126	8,309	7,226	6,144	5,555	6,225	6,791
	FAX照会件数				524	1,499	2,296	3,354	3,990	3,537	3,729	4,584	5,716
	照会件数計	3,597	4,540	4,662	4,816	7,341	8,422	11,663	11,216	9,681	9,284	10,809	12,507
	申請(審査)件数	1,041	969	915	1,204	1,207	1,257	1,090	1,011	1,000	924	1,184	1,176
公・民審査件数計		2,148	2,053	1,698	2,010	1,981	2,038	1,888	1,941	2,064	2,295	2,570	2,548

表2 事前審査件数推移表



指導内容

公共、民間各事業の事前審査の結果、事業者に指導した内容は表3のとおりである。次年度継続、取り下げを除くと審査件数は1,455件である。総括的に見ると書類審査での回答1,096件(75%)、以下踏査7件(1%)、試掘351件(24%)で、前年とほぼ変わりないが試掘が若干増加している。審査結果は開発同意185件(13%)、慎重工事1,040件(71%)、工事立会178件(12%)、発掘調査51件(3.5%)、要協議(設計未定、遺跡ありなど)1件である。

試掘調査・確認調査

包蔵地内で行われる確認調査、包蔵地外で行われる試掘調査(以下試掘調査と総称する)は東区32、博多区112、中央区6、南区55、城南区39、早良区67、西区60件、総計371件で、遺跡は125遺跡である。試掘のうち隣接地に当たる遺跡は64遺跡であった。試掘件数は昨年と同数であったが、東部で22件増西部で同数減少している。

10件以上試掘した遺跡としては有田遺跡群11件、那珂遺跡群12件、原遺跡12件で、博多遺跡群は5件に減少しており、周辺部で個人住宅、個人事業が増加し、都心部は開発が復調するまでには至っていない。

表3 平成23年度事前審査内訳

区名	事業	審査種別（書類審査・現地踏査・試掘調査）でみた判断指示の結果														区別審査件数		照会件数（*）		
		開発同意		慎重工事			工事立会		発掘調査			協議			審査	取り	公民別計	区計		
		書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	書類	踏査	試掘	結果	上げ					
東	公共	2	0	6	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	221		
	民間	20	0	8	67	0	14	17	0	4	0	0	0	0	0	0	2	144	1,876	
博多	公共	9	0	4	34	0	5	8	0	0	0	0	3	0	0	5	0	68	162	
	民間	5	0	13	96	0	54	25	0	13	7	0	15	0	0	1	11	240	2,368	
中央	公共	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	81	
	民間	4	0	1	14	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	23	1,987	
南	公共	3	0	1	6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	12	214	
	民間	14	0	10	94	3	26	14	0	9	2	0	5	1	0	0	0	2	192	2,148
城南	公共	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	143	
	民間	8	0	6	84	2	27	6	0	3	1	0	2	0	0	1	2	142	1,157	
早良	公共	7	0	2	16	0	2	5	0	1	0	0	1	0	0	0	0	34	176	
	民間	11	0	10	150	1	42	19	0	5	3	0	5	0	0	2	7	255	1,667	
西	公共	1	0	3	17	0	3	7	0	3	0	0	0	0	0	0	2	36	184	
	民間	26	0	9	125	0	20	11	0	2	0	0	7	0	0	0	4	0	240	1,280
小計	公共	22	0	18	77	1	12	21	0	4	0	0	4	0	0	0	7	1	191	1,181
	民間	88	0	57	630	6	186	93	0	36	13	0	34	1	0	0	8	24	1,176	12,507
道路下水道局（**） 公共汚水橋 (市内全域24件)		128		24												総計				
合計		110	0	75	835	7	198	138	0	40	13	0	38	1	0	0	15	25	1,495	

(*) 照会の公共は事業照会件数。民間は窓口およびFAX照会の合計（小計には区不明4件、市外1件を含む）。

(**) 道路下水道局の公共汚水橋は複数案件が一括提出されるため、総件数と、審査結果の内訳のみを示す。

窓口等照会

民間業者等による窓口における埋蔵文化財の有無に係わる照会等は6,791件、ファックスでの照会は5,716件、あわせて12,507件である。昨年よりさらに約1,700件の増加である。各区とも1,000件を超えるが、博多、中央、南区では2,000件を前後している。

3. 埋蔵文化財包蔵地の改訂

埋蔵文化財包蔵地の範囲改訂は27遺跡で行った。平成23年度に発見、登録したのは2遺跡で西区長峰園場整備に伴って新たに谷口A遺跡、谷口B遺跡を新規登録した。遺跡の範囲拡大は9件、縮小は2件であり、12件で隣接地の解除を行った。

III 発掘調査

1. 平成23年度の発掘調査

市域内で実施された本年度の発掘調査件数は、表9に示したように22年度からの継続事業が4件、23年度新規事業が47件の計51件である。このうち5件が平成24年度に継続した。この発掘件数には文化財保護法第93、94条に基づく記録保存のための発掘調査46件のはか、史跡整備工事に伴う調査(1106,1116,1122,1137,1141)の、あわせて5件も含んでいる。

51件の発掘調査面積は22,515m²で、前年度に比べほぼ半減した(表7・表8右)。これは圃場整備が1,982m²と激減したことによる影響が大きい。公民別では公共事業が8,874m²、民間事業が13,701m²であり、民間が61%を占めた。昨年度までは公共事業が民間事業を大きく上回っていたが、国立大学法人関係の調査を今年度分から民間事業扱いとしたためである。なお、昨年度との比較のため、国立大学法人分を公共事業扱いとすると、公共事業が16,344m²、民間事業が6,171m²となり、公共が73%となり、昨年度より5%高い数字となった。民間事業総面積は前年比約58%減少し、圃場整備を含めた公共事業は約49%の減少となった。史跡関連の調査を除いた個々の発掘調査の面積は、100m²以下が14件、101～300m²が15件、301～500m²が4件、501～1,000m²が9件、1,001m²～10,000m²が6件、10,000m²以上の調査は今年度はなかった。300m²以下の小規模調査は29件(63%)で、昨年の28件(56%)より増加している。1,000m²以上の調査は約20%と昨年度(26%)より減少している。なお博多遺跡群、箱崎遺跡などでは遺構面が複数あり、これを面ごとに調査しているため、実際の発掘面積は増加する。

IV 公開活動

市民への公開を目的として、記者発表や現地説明会、体験学習および福岡市埋蔵文化財調査報告書の刊行等がある。平成23年度は西区元岡第56次調査と西区女原笠掛遺跡(瓦窯跡)、福岡城第65次(鴻臚館第29次)の調査に対し記者発表を行い、現地説明会を実施した。

また市内小中学校の体験学習の一環として発掘調査や整理作業への参加を受け入れており、平成23年度は、福岡市立玄洋中学校・高取中学校・下山門中学校・博多中学校・城西中学校・筑紫丘中学校の6校を市内各発掘現場及び市内にある3整理室において、職場体験学習を行った。公開・活用に資するための埋蔵文化財報告書刊行は、表5のとおり計42冊が刊行された。

表4 平成23年度福岡市現地説明会・報道発表一覧

番号	調査番号	遺跡名	次	住 所	現場担当者	記者発表 現地説明会	見学者 (人)	備 考
1	1043	元岡・桑原遺跡群 (元岡 G6号墳)	56	西区元岡	大塚	2011/9/21 2011/9/23	574	「庚寅」名入り象嵌大刀を確認した古墳
2	1035	女原瓦窯跡	1	西区女原	酒井	2011/11/10 2011/11/12	204	鴻臚館の屋根を葺いた瓦を焼成した窯跡
3	1116	福岡城跡 (鴻臚館跡)	65 (29)	中央区域内	常松	2011/11/16 2011/11/19	150	7世紀後半南北館で異なる東門の位置・構造

表5 平成23年度刊行報告書一覧

集	書名	図書名	収録調査番号
1134	有田・小田部49	—有田遺跡群第234次調査報告書—	0927
1135	有田・小田部50	—第236・237・239次調査の報告—	1031・1032・1039
1136	井尻遺跡B20	—井尻B遺跡第27次調査報告—	0641
1137	今宿五郎江11	—今宿五郎江遺跡第10次調査報告(3) —	0420
1138	今宿地区古墳群詳細分布調査報告		0493・0553・0660・0759
1139	谷上古墳群1	—谷上古墳群A群第3・4次調査報告—	0941・1041
1140	入部 XIV	—東入部遺跡第2次調査報告(5) —	9165
1141	入部 XV	—東入部遺跡第11次調査報告—	9529
1142	卯内尺古墳群	—卯内尺古墳群第2次調査報告—	1021
1143	乙石遺跡1	—第4次調査報告—	1020
1144	大塚遺跡5	—第16次・17次調査の報告—	0806・0855
1145	香椎A遺跡4	—一般国道博多バイパス建設に伴う調査4—	1009
1146	金武青木	—金武西地区基盤整備促進事業関係報告—	0909・0929・1002
1147	龍田水ヶ元遺跡3	—龍田水ヶ元遺跡3—	0851
1148	久保園遺跡4	—第4次調査報告—	0827
1149	重留村下遺跡5	—第6次調査報告—	1018
1150	高畠遺跡2	—高畠遺跡第20次調査報告—	0833
1151	谷道路2・女原遺跡5	—谷道路第3次・女原遺跡第7次調査の報告—	0862・0920
1152	市道弓切通線工事に伴う発掘調査報告書3	—弓切道路第6次調査の報告—	1104
1153	辻ノ花遺跡	—第1次調査報告—	0928
1154	那珂59	—那珂遺跡群第82次調査報告—	0142
1155	那珂60	—那珂遺跡群第125次調査の報告—	0910
1156	那珂61	—第128次調査の報告—	1007
1157	那珂62	—第129次調査の報告—	1008
1158	那珂63	—那珂遺跡群第130次調査報告—	1015
1159	中村町遺跡4	—中村町遺跡第5次調査報告—	1010
1160	中村町遺跡5	—中村町遺跡第6次調査報告—	1029
1161	七曲古墳群	—5・6号墳の調査—	1019
1162	中南部10	—博多遺跡群第146次調査報告・野友A遺跡第2次調査報告—	0357・8337
1163	箱崎44	—箱崎遺跡第50・60次調査報告—	0517・0762
1164	箱崎45	—箱崎遺跡第66次調査報告—	1011
1165	箱崎46	—箱崎遺跡第67次調査の報告—	1026
1166	箱崎47	—箱崎遺跡第68次調査報告—	1034
1167	原遺跡14	—第26次調査報告—	1017
1168	原遺跡15	—第27次調査報告—	1027
1169	比恵63	—比恵遺跡群第121次・第124次調査の報告—	1016・1107
1170	比恵64	—比恵遺跡群第122次調査報告—	1023
1171	南八幡遺跡9	—南八幡遺跡第17次調査の報告—	0926
1172	元岡・桑原遺跡群19	—第9次調査・18次調査の報告3—	9851・9946
1173	元岡・桑原遺跡群20	—第43・48・49・50・51・54次調査の報告—	0486・0563・0611・0709・0741・0844
1174	元岡・桑原遺跡群21	—第42次調査の報告1—	0451
1175	史跡 鴻臚館跡19	—南館部分の調査(1) —	8829・8910・9005・9130・9236・9420・9537・9620・9736・9910・0309
-	福岡市埋蔵文化財年報 VOL.25	—平成22(2010)年度版—	1003・1005・1024・1030・1044・1045

V 平成23年度発掘調査概要・報告

調査概要・報告は表9の調査番号順に掲載し、位置番号は右ページの地図に一致する。また各報文の図【1. 調査地点の位置】の()内は、左から福岡市都市計画図図幅番号・図幅名称・遺跡番号・縮尺である。

表6 発掘調査件数の推移()前年度からの継続件数

事業	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
民間	52(3)	52(3)	44(4)	38(0)	21(6)	30(0)	27(1)
団場整備	4(2)	1(1)	0(0)	0(0)	4(0)	4(2)	1(3)
公共	27(6)	27(6)	33(4)	29(4)	25(3)	16(3)	23(3)
合計	83(11)	80(11)	77(8)	67(8)	50(9)	50(5)	51(7)

表7 発掘調査面積の推移(m²)

事業	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度
民間	24,556	12,265	15,184	17,651	11,190	15,649	6,175
団場整備	42,152	56,000	21,000	0	0	9,774	1,984
公共	43,568	22,708	56,530	48,729	33,099	22,856	15,322
合計	110,276	90,973	92,714	66,380	44,289	48,278	23,480

表8 発掘調査内訳

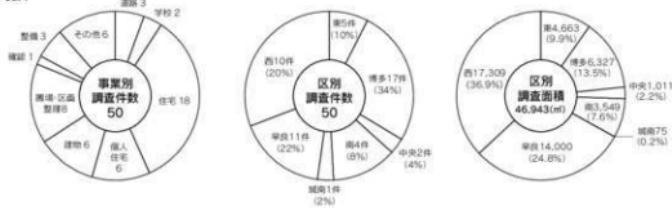


表9 平成23年度調査一覧(前年度からの継続含む)

位置	遺跡名	次数	調査番号	調査原因	区	所在地	調査面積	調査開始	調査終了	遺跡略号	参考	報告書
20	有田遺跡群	240	1124	宅地造成	早良	小田部五丁目38番1,2	84	H23.8.25	H23.9.9	ART		本書
20	有田遺跡群	241	1128	個人住宅	早良	有田一丁目10番11	69	H23.9.15	H23.9.29	ART		
20	有田遺跡群	242	1129	個人住宅	早良	有田1丁目25-16	44	H23.10.5	H23.10.14	ART		
20	有田遺跡群	243	1130	個人住宅	早良	有田2丁目191番	57	H23.10.17	H23.10.27	ART		
20	有田遺跡群	244	1146	個人住宅	早良	有田一丁目10番5	167	H24.3.1	H24.3.30	ART		
13	井尻B遺跡	36	1112	個人住宅	南	井尻1丁目728-2	175	H23.7.1	H23.8.19	IGB		
24	井相田C遺跡	10	1135	共同住宅	博多	井相田二丁目6番4	592	H23.12.12	H24.2.3	ISC		
22	内野道路	4	1132	道路抵幅	内良	内野5丁目地内	21	H23.11.8	H23.11.18	UCN		1183
15	大塚道路	18	1117	土地面積整理	西	今宿3丁目4-外	1574	H23.7.25		OTS		
16	山王道路	7	1118	事務所・倉庫	博多	山王2丁目29番	343	H23.7.28	H23.10.19	SNN		1186
11	住吉神社遺跡	2	1109	防火水槽設置	博多	住吉3丁目1-51	108	H23.6.6	H23.6.23	SJV		
4	寺島遺跡	3	1101	共同住宅	南	横手南町11番	270	H23.4.11	H23.5.2	TRS		1187
6	戸切遺跡	6	1104	道路抵幅	西	戸切3丁目地内	62	H23.5.9	H23.5.20	TGR		
14	徳水A遺跡	6	1115	土地面積整理	西	徳水内	105	H23.7.12	H23.7.21	TOA		1188
14	徳水A遺跡	7	1127	土地面積整理	西	徳水内	406	H23.9.20	H23.11.21	TOA		1188
23	徳水B遺跡	4	1133	土地面積整理	西	徳水内	1280	H23.11.15		TOB		
7	那珂遺跡群	131	1105	個人住宅	博多	竹下5丁目20番2	88	H23.5.9	H23.6.8	NAK		1190
7	那珂遺跡群	132	1113	共同住宅	博多	東光町1丁目28	255	H23.7.4	H23.10.7	NAK		1191
7	那珂遺跡群	133	1114	共同住宅	博多	東光町1丁目319他	602	H23.7.5	H23.9.20	NAK		1192
7	那珂遺跡群	134	1125	個人住宅	博多	那珂1丁目336~389	292	H23.9.7	H23.10.18	NAK		1190
7	那珂遺跡群	135	1136	共同住宅	博多	東光町1丁目264他	193	H24.1.10	H24.3.7	NAK		1193
25	長尾遺跡	3	1142	共同住宅	城南	長尾4丁目68, 69	163	H24.2.1	H24.2.22	NGO		
3	中ノ原遺跡	5	1038	切土造成	博多	西春町4丁目1番	198	H23.2.1	H23.4.16	NNH		
12	長峰谷口B遺跡	1	1111	圃場整備	早良	早良4丁目地内	1984	H23.7.4	H23.8.19	NGB		1205
28	野水日C遺跡	5	1145	共同住宅	南	野水2丁目325-1他	245	H24.3.1	H24.3.21	NTM		
17	博多道路群	192	1119	浸水対策事業	博多	博多駅前1丁目8地内	221	H23.10.27	HKT			1197

位置	道路名	次数	調査番号	調査原因	区	所在地	調査面積	調査開始	調査終了	道路番号	備考	報告書
21	原道跡	28	1126	道路扒掘	早良	原6丁目868-1他	628	H23.9.20	H24.3.7	HAA		1198
21	原道跡	29	1131	共同住宅	早良	原6丁目822-1	165	H23.10.17	H23.11.7	HAA		1199
21	原道跡	30	1134	道路扒掘	早良	原7丁目1190番	824	H23.11.21	H24.3.7	HAA		1198
21	原道跡	31	1139	共同住宅	早良	原7丁目1190番1	966	H24.1.23	H24.3.7	HAA		1200
9	比恵道跡群	124	1107	事務所建設	博多	博多駅南3丁目451-2他	53	H23.5.13	H23.5.24	HIE		
9	比恵道跡群	125	1138	共同住宅	博多	博多駅南5丁目110番1	550	H24.1.16		HIE		
26	東那珂道跡	7	1143	共同住宅	博多	東那珂1丁目300-1	138	H24.2.6	H24.2.29	HGN		
19	松原道跡	6	1123	共同住宅	南	松原7丁目714-2	83	H23.8.24	H23.9.5	HBR		1202
18	南八幡道跡	19	1120	道路踏切工事	博多	寿町2丁目	80	H23.8.22	H23.9.16	MHM		1206
27	席田青木道跡	8	1144	個人住宅	博多	青木1丁目362番1	90	H24.2.7	H24.2.8	MAI		本書
1	元岡・桑原道跡群	55	1001	学校建設	西	大字元岡字二又	543	H22.4.1		MOT		
1	元岡・桑原道跡群	56	1043	学校建設	西	大字元岡字二又	3437	H22.9.14	H23.12.28	MOT	G-3・6号填	
1	元岡・桑原道跡群	57	1103	学校建設	西		1750	H23.4.9		MOT		
1	元岡・桑原道跡群	58	1110	学校建設	西		1029	H23.6.20		MOT		
1	元岡・桑原道跡群	59	1140	学校建設	西		771	H24.1.23		MOT		
29	香椎E道跡	2	1147	戸建住宅	東	香椎2丁目843, 869	95	H24.3.28	H24.4.4	KSE		本書
5	今宿五郎江道跡	14	1102	土地区画整理	西	今宿町75-2外	834	H23.4.19	H23.7.13	IZG		1182
5	今宿五郎江道跡	15	1121	土地区画整理	西	今宿町75	400	H23.8.19	H23.11.9	IZG		1182
2	女原笠掛道跡	2	1035	土地区画整理	西	大字女原字向原	401	H23.1.13		MRK	女原瓦窯跡1次	
10	安野B道跡	5	1108	共同住宅	博多	南木町2丁目12-2, 13他	86	H23.5.26	H23.6.16	MGB		本書
8	福岡城跡	64	1106	園路整備	中央	城内	54	H23.4.20	H23.5.27	FUE	本丸～南丸	
8	福岡城跡	65	1116	史跡整備	中央	城内	600	H23.6.1	H24.3.16	FUE	鸿臘館29次	
8	福岡城跡	66	1122	堀塁工事	中央	城内	70	H23.8.10	H23.10.31	FUE	三の丸	
8	福岡城跡	67	1137	史跡整備	中央	城内1番1, 1番2	224	H24.1.16	H24.3.16	FUE	上ノ橋	
8	福岡城跡	68	1141	史跡整備	中央	城内1番1, 9番	18	H24.1.16	H24.3.15	FUE		



1035 女原笠掛遺跡 (MRK-2)

所在地	福岡市西区女原字向原	調査面積	502m ²
調査原因	土地区画整理	担当者	瀧本正志
調査期間	2011.1.13～2012.3.30	処置	現地保存

位置と環境 繼続調査である。調査地は、伊都平野の東辺を画す高祖山(416m)から北へ延びる低丘陵の西側斜面に位置し、標高8m前後を測る。丘陵は、花崗岩バイラン土の堆積地が浸食作用により形成されている。近世後半期までは海岸線が付近まで入り込んでいた。昨年度末までの調査で瓦窯や灰原が検出され、鴻臚館に関連する遺構の可能性が想定されていた。

検出遺構 操業時期が9世紀後半～10世紀前半に推定される瓦専用の地下式有階無段窯窓が3基と付随する灰原。さらには瓦窯本体を再利用した12世紀後半～13世紀初頭の中世墓が2基。古墳時代初頭の土器集積遺構や炭焼窓跡が1基。瓦窯規模は全長5.1m～6m、幅1.6m、高さ約1mを測る。焚口には自然石や平瓦を積み上げた袖石を設け、燃焼部は船底状に掘り下げている。焼成部床面の勾配は19～22度。操業回数は3基とも6回以上である。いずれの窯も煙道は欠失して天井部は落盤しているが、良好な状態で残存している。

出土遺物 土師器、須恵器、磁器、石器、瓦、鉄器がコントナ箱で約300箱が出土。大半は丸・平瓦で、3種類の軒丸瓦や2種類の軒平瓦、鬼瓦も出土。土師器杯・椀、磁器碗は中世墓の副葬品。

まとめ 瓦窯は、平安時代前半期の鴻臚館整備に伴い築造され、6～8基の瓦窯が設けられた可能性が高い。今回の調査では、瓦製作工房や材料製作場などを含む瓦屋全体像を知るには至らなかったが、平安時代の窯業技術史や鴻臚館施設の変遷を知る上で学術的に価値が高い資料を得ることができた。

瓦窯跡は現地保存することとなり、調査は遺構を完掘せずに必要範囲に限定して終了した。調査報告書は2013年度に刊行予定。



1. 調査地点の位置 (112 今宿 624 1:8000)



2. 1～3号窯全景 (西から)



3. 666A型式軒平瓦

1043 元岡・桑原遺跡群第56次調査 (MOT-56)

所在地	西区大字元岡字二又	調査面積	6,970m ²
調査原因	大学移転用地造成	担当者	吉留秀敏 大塚紀宣 比嘉えりか
調査期間	2010.9.14～2011.12.28	処置	現地保存

位置と環境 56次調査区は、谷部分と尾根部分に広がる。今年度は昨年度に伐開・試掘調査を行った範囲に加え、2区・3区の谷部分にも範囲を広げ、調査を実施した。

検出遺構 尾根東斜面にあたる1区では、G-6号墳が7世紀前半に築造された古墳であることが判明した。石室は大型の石材を使用し、石室長約6.5mの両袖单室の横穴式石室で、石室天井部分まで良好に遺存している。墳丘は原形を留めておらず、周溝を元にすると墳丘直径は18mとなる。1区ではG-6号墳の南側で中世の建物群を検出した。建物は5棟以上が確認でき、2間×3間の規模の建物が規則的に並んだ状態で出土した。

2区は1区の東側の谷部分で、弥生時代前期の土器集積が確認された。土器群は水際の範囲に散布しており、42次でみられた土器集積に類似している。

3区は、尾根部分のG-3号墳及び尾根西側の谷部分で、G-3号墳は遺存状況が悪く、両袖单室の横穴式石室で玄室幅1.2m、玄室長2.1mの石室規模である。谷部分では古代から中世にかけての遺構群を検出した。

出土遺物 40箱相当の遺物が出土した。特筆すべき遺物は、1区 G-6号墳から出土した象嵌銘文入り大刀で、19文字の銘文から大刀の製作年が570年であることが確定し、国内での最初の曆使用の証拠と考えられている。

まとめ G-6号墳は元岡・桑原地区の首長墓の系譜を引き、6世紀末に築造された55次調査 G-1号墳に続くこの地域で最後出の古墳とみられ、古墳時代から古代における元岡・桑原地区や糸島半島の重要性を示す資料である。

調査報告書は2012年度以降刊行予定。



1. 調査地点の位置 (140元岡 2782 1:8000)



2. G-6号墳全景 (南から)



3. G-3号墳石室 (南から)

1103 元岡・桑原遺跡群第57次調査 (MOT-57)

所在地 西区大字元岡字二又

調査面積 2,240m²

調査原因 大学移転用地造成

担当者 長家 伸 大塚紀宣

調査期間 2011.4.12～継続

処置 現地保存

位置と環境 57次調査区は56次調査区の東側谷部分を上がった谷奥部にあたり、44次調査の東側に隣接する部分である。谷開口部では46次調査で多量の土器が出土している。谷は幅が狭いものの、試掘調査で土器や鉄滓を含む層が確認されたことから、調査を実施している。

検出遺構 谷部分で古墳時代から古代の遺物包含層を検出している。遺物包含層は上層に中世、下層に古代、最下層に古墳時代の遺物を含む。谷に面する西側斜面部分には製鍊炉・鍛冶炉が分布しており、層位より鍛冶炉が谷部に近い場所に築かれた後、製鍊炉が後出して築かれ、また斜面部分にも鍛冶炉群が築造されるという変遷を追うことができる。製鍊炉は8世紀後半、鍛冶炉は7世紀後半～8世紀以降に築造されたものと推定される。

出土遺物 現時点で土器・鉄滓を含め、100箱以上の遺物が確認されている。谷部包含層から、須恵器・土師器を中心とした土器類、建築部材や農具等に使用された木器が多数出土している。製鉄に関連するとみられる鉄滓が出土しており、谷部周辺に多数の製鉄炉が存在したことが想定できる。

まとめ 57次調査区が位置する元岡丘陵南麓部分でも、桑原地区と同様に製鍊炉・鍛冶炉群が存在することが判明した。谷全体の様相については次年度以降調査区を拡げて確認を進めていく予定である。

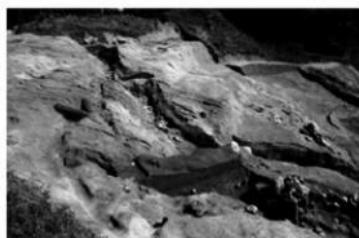
調査報告書の刊行は2014年度以降の予定である。



1. 調査地点の位置 (140元岡 2782 1:8000)



2. 全景 (北から)



3. 中世の大型の溝 (西から)

1106 福岡城跡第64次調査 (FUE-64)

所在地	中央区城内1丁目1	調査面積	54m ²
調査原因	園路整備に伴う確認調査	担当者	常松幹雄
調査期間	2011.04.20～2011.05.27	処置	現地保存

位置と環境 博多湾のほぼ中央に突きだした福崎丘陵上に立地する。この丘陵は近世には黒田氏52万石の居城である福岡城が置かれた。現在は、福岡城の大部分は、国史跡に指定され、舞鶴公園となっている。

園路整備に伴う遺構面確認のための発掘調査を実施した。福岡城多聞櫓の西と多聞櫓から松木坂、そして本丸跡の3地区について27地点の試掘溝を設定した。標高は多聞櫓の西が約11m、多聞櫓から松木坂が約18m、本丸跡が約23mで最も高い。

検出遺構 福岡城多聞櫓の西では、扁平な石敷き遺構が確認されたが、規則性はみられないため礎石となるかは疑わしい。

太鼓櫓の南西隅では石垣に沿って側溝が検出された。側溝は石垣裾と幅約30cmを隔てて自然石を積み上げたもので、底には礫が敷き込まれていた。松木坂付近は、地山が露頭している部分が散見される。

本丸については、2カ所で石敷き状の遺構が検出された。これらの扁平な石敷きがどのような機能をはたしていたかは現況では不明である。天守台の鉄御門付近のT-17ではよく踏みしめられた整地面が検出された。

出土遺物 瓦などコンテナ50箱が出土した。

まとめ 今回の試掘調査は、限られた面積の確認調査であるが、太鼓櫓に付設する側溝の存在を明らかにした。また本丸跡についても新たな知見が得られたことは貴重な成果といえよう。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 193 1:8000)



2. 側溝 (太鼓櫓の南西隅・東より)



3. 本丸表御門近くの整地層 (東より)

1108 麦野B遺跡第5次調査 (MGB-5)

所在地 博多区南本町2丁目12-2
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 2011.5.26～2011.6.16

調査面積 86m²
 担当者 荒牧宏行
 処置 記録保存

1. 調査に至る経過

平成23年4月13日、株式会社コーチアーアルイより上記地内における共同住宅建設に伴い「埋蔵文化財の有無について(照会)」の書類が埋蔵文化財課に提出された。これを受けた当課では書類審査を行い、同年4月26日に試掘を行った。その結果、遺構を確認し、遺構面まで掘削されるマンション本体と地下式駐車場の範囲を調査対象とする協議を行った。なお、申請地内の南側は平成22年度に申請され、試掘を実施したが遺構は検出されず、「慎重工事」の回答を行った。そのため、今回、南側は調査対象から外した。

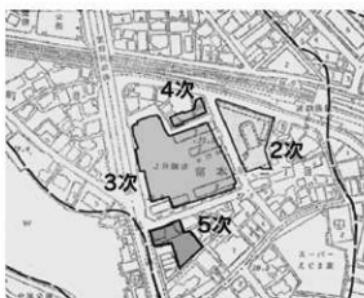
2. 位置と環境

調査地点は福岡平野の中央部に断続的に南北に延びた阿蘇-4の火砕流堆積物からなる洪積台地上に立地する。この台地周縁部は本調査の麦野C遺跡を含め、隣接する麦野A、B遺跡や南八幡遺跡とともに開析を受け、複雑に入り組んだ形状を呈している。また、ローム上に黒ボク20cm程度の厚さで堆積している特徴が見られる。

上記の遺跡からはこれまで8世紀代の竪穴住居跡が多く検出される特異な状況がみられる。また、周縁部近くに旧石器の出土も確認されている。本調査区北側の第3次調査地点でも北側に下降していく緩斜面からナイフ形石器や台形石器の出土をみた。従って、今回の調査においても旧石器の出土が期待された。



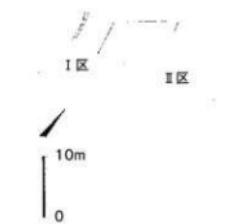
1. 調査地点の位置 (12麦野0049 1:8,000)



2. 2～5次調査地点 (1:4,000)



4. II区調査区全景 (西から)

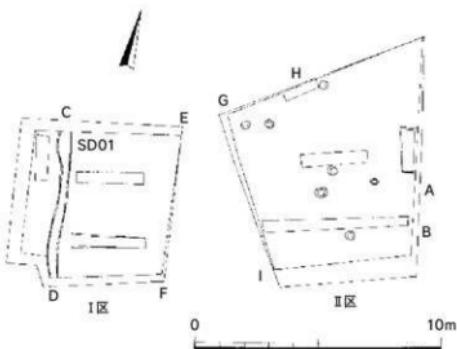


3. 敷地境界と調査地 (1:800)

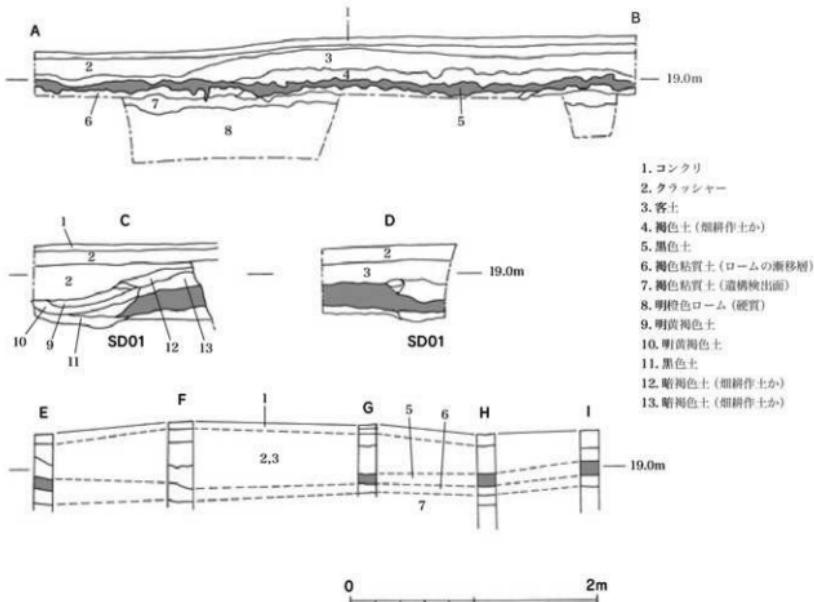
3. 基本層序と地形

コンクリ、クラッシャー、客土など現代の堆積物が層厚20~50cm程度みられ、その下層に黒ボク層、鳥栖ローム層が堆積する。黒ボク層は10cm程度の厚さで起伏が著しい。その下部のローム層は汚染された漸移層となる。

ローム層の上面は標高18.9m~18.6mを測り、東西約16mで30cm西側に下がった斜面の地形を呈す。第3次、4次調査から北側に延びる尾根線と西側の緩やかな谷部の地形が確認されているので、大きくは西側の谷部斜面に位置しているものと考えられる。



5. 造構配図 (1:200)



6. 土層図 (1:40)

4. 検出遺構

幅40cm、深さ約10cmのSD01が南北に近い方向で走行している。埋土は黒褐色土からなり、北側では黒ボクを切る落ち込みが観察できたが、南側では不明瞭であった。遺物は出土していない。また、柱穴状の落ち込みが検出されたが、輪郭が不明瞭で、出土遺物もなく木根の可能性が高い。旧石器の確認を行うためにトレンチを設定し深掘りしたが、石器は出土しなかった。

5.まとめ

北側の奈良時代の集落からは外れ、土地利用が明確ではないが、SD01は耕作に関わる溝の可能性があり、畠地としての利用が考えられる。旧石器に関しては黒色土の堆積をみるとから近現代の大きな削平は考え難く、当地には展開していないものと思われる。



7. I区全景(北側から)



8. SD01 北側土層

1109 住吉神社遺跡第2次調査 (SYJ-2)

所在地	博多区住吉3丁目1-51	調査面積	108m ²
調査原因	防災施設建設	担当者	佐藤一郎
調査期間	2011.06.06～2011.06.23	処置	記録保存

位置と環境 博多湾の中程の、現在の天神あたりは、中世以前は湾入部を成しており、古冷泉湾と呼んでいるが、住吉神社はこの湾入部の奥まったところに築かれている。今回調査した地点は、この住吉神社の境内の一角である。

検出遺構 遺物包含層を中心とした調査で、包含層は GL - 1.4m の客土下から認められ、1層（灰褐色土）では土師器杯・小皿が多量に出土した。時期は13世紀後半。2層（褐灰色粘質土）では土師器の他、中国陶磁、中国系瓦が出土した。時期は12世紀後半。地山は粗砂で、標高1.8m 前後を測り、調査区域内では大きな比高差はなかったが、北西から南東にかけて傾斜している。北西隅の1層上面では15世紀代の土坑1基を検出した。

出土遺物 コンテナ24箱分が出土した。中国陶磁、中国系瓦（花卉文軒丸瓦・指頭任痕重弧文軒平瓦を含む）など、瓦の比率が50%を超える。

まとめ 遺物包含層を中心とした調査であったが、土師器、中国陶磁器、中国系瓦の出土状況は中世前期における博多や箱崎のあり方と共通するものがある。12世紀後半に入って、箱崎と同じように交易の中心である博多を補完する役割を担ったのではないかと考えられる。



1. 調査地点の位置 (49天神 2820 1:8000)



2. 調査区全景 (南から)



3. 青銅觀音像

1110 元岡・桑原遺跡群第58次調査 (MOT-58)

所在地 西区大字元岡

調査面積 4,420m²

調査原因 大学移転用地造成

担当者 長家 伸 大塚紀宣

調査期間 2011.06.20～継続中

処置 記録保存

位置と環境 58次調査区は56次調査区の東側谷部分を上がった谷奥部分にある。現況で谷頭状の地形で周囲を斜面で囲まれている。調査区は斜面部分及び谷底部に設定した。

検出遺構 丘陵の斜面部分では幅2m、深さ2mの大型の溝状遺構が検出された。溝は谷や尾根を分断するように掘られており、斜面を緩く下るように延びている。構造・規模からみて中世の山城に伴う堀切と推定される。溝の断面形状はV字に近い箱形で、途中分岐する部分もみられ、人為的に掘り込まれたことが明らかである。

斜面南側の谷部分には中世以前の包含層が確認され、古代と縄文早期の包含層からは多数の遺物が出土している。古代の包含層は今年度調査を実施し、縄文早期の包含層は次年度以降に調査予定である。

出土遺物 現段階で、パンケース8箱の遺物が出土している。大型の溝状遺構からは青磁・白磁の破片が少量出土している。谷部分の遺物包含層からは、古墳時代から古代の須恵器・土師器破片や縄文土器が出土している。縄文土器のなかには押型文土器の破片もみられる。

まとめ 大型の溝状遺構は、調査区北側の尾根頂部付近に未知の山城が存在する可能性を示唆しており、溝状遺構は山城前面の防衛線として築かれたとも考えられる。谷部では縄文時代の厚い堆積層が認められ、次年度の調査に期待が寄せられる。

調査報告書の刊行は2014年度以降の予定である。



1. 調査地点の位置 (140 元岡 2782 1:8000)



2. 全景（南から）



3. 中世の大型溝（西から）

1112 井尻B遺跡第36次調査 (IGB-36)

所在地	南区井尻1丁目728-2	調査面積	175m ²
調査原因	個人専用住宅建設	担当者	森本幹彦
調査期間	2011.07.01～2011.08.19	処置	記録保存

位置と環境 福岡平野の中央部、那珂川西岸の中位段丘上に立地する。井尻B遺跡は、弥生時代の青銅器生産を伴う集落や墳墓群、古墳時代の集落や埴輪を伴う古墳、7世紀前後の寺院・官衙関連の遺構・遺物などがみつかっており、福岡平野の代表的な遺跡の一つである。

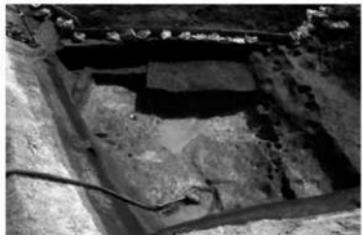
検出遺構 GL-100～-150cmでローム層または黒ボク層である。水路等の溝や不明ピットを検出した。本調査区は台地上の縁に位置しており、井尻B遺跡集落域の外縁部と考えられる。検出した溝は大小3条以上あり、互いに重複する。時期は弥生時代後期から古墳時代前期前半を中心とするものである。中でも調査区の中央を南北方向に走る大溝は幅6m前後、遺構面からの深さ1.5m以上を測る。北隣の17次調査F区の大溝と一連のものであり、直線的に50m以上伸びることが明らかになった。大溝は下層の砂層の堆積が著しく、水量豊富な水路として機能していたことがうかがえ、土層の堆積状況から3回以上の再掘削が考えられるものである。

出土遺物 大溝の覆土を中心に、コンテナ約20箱出土した。遺構規模に比べて、出土量が少なく、同時期の「環濠」等の遺物出土状況とは異なっている。弥生時代後期から古墳時代前期前半の土器が多く、弥生時代中期の土器、甕棺片や黒曜石石器が一定量混じる。古墳時代後期以降の遺物は少量である。特殊な遺物には、銅鐸の内型とみられる土製品がある。

まとめ 小面積の調査ではあったが、弥生時代後期から古墳時代の良好な遺構・遺物が出土し、特に50m以上直線的に伸びる溝は福岡平野の水利を考える上で、興味深い資料である。



1. 調査地点の位置 (25井尻 90 1:8000)



2. Ⅲ区全景 (北から)



3. 大溝掘削状況 (南から)

1116 福岡城跡第65次調査 (FUE-65)

所在地	中央区城内1丁目1	調査面積	600m ²
調査原因	確認調査	担当者	常松幹雄
調査期間	2011.06.01～2011.03.16	処置	現地保存

位置と環境 かつて鴻臚館は、博多湾に面した高さ4mほどの台地の上に建物群が建てられていたが、黒田長政が福岡城を築城する際に周囲の低地を厚く埋立てて現在の姿に変わったことが、これまでの調査により判明している。従って発掘調査は、福岡城を対象とする上層遺構の調査と、福岡城盛土を除去した後に行う鴻臚館跡を対象とする下層遺構の調査の2面を対象として実施している。

検出遺構 調査区は、鴻臚館北館の奈良時代の東門跡から東側に向かって傾斜する谷部にかけて、東西60m、幅10mの範囲である。検出された主な遺構は、以下の4つに大別される。

1. 7世紀後半頃の掘立柱建物跡で、塀(柱列)から東側に張りだす建物と考えられ、「7世紀後半の門」、「門のそばに張りだす建物」などの可能性がある。
2. 8世紀前半頃の東門跡
3. 東門跡の東側で地形が一段低くなる部分。造成時期は16世紀中頃以降。
4. 上之橋御門から二の丸東御門へ続く道路側溝の一部(北側の側溝など)武家屋敷の地境付近と推定される。

出土遺物 古代の瓦を中心に陶磁器・土師器・須恵器、近世の瓦・陶磁器など、コンテナケース500箱分が出土した。

まとめ 今回および過去の調査により、鴻臚館の東面(入り口部分)がひな壇状に造られていた可能性が強まった。鴻臚館を訪れる外交使節などに対する視覚的な効果をねらったものと考えられよう。次年度にかけて、東側入り口部分の確認調査をさらに進めていく。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 192・193 1:8000)



2. 調査区全景(東から)



3. 7世紀後半の掘立柱列の東側に張り出す柱穴と8世紀前半の東門(南から)

1117 大塚遺跡第18次調査 (OTS-18)

所在地	西区今宿町312-4外	調査面積	1,968m ²
調査原因	確認調査	担当者	榎本義嗣
調査期間	2011.07.25～2012.06.07	処置	記録保存

位置と環境 大塚遺跡は、糸島平野東縁の小平野である今宿平野の東側に位置する遺跡で、高祖山から北側に延びる中位段丘の先端部に立地する。調査地点は、段丘の東側斜面に位置し、西側の尾根上には大塚古墳が占地する。調査区のほぼ中央部には南北方向の谷が開析しており、調査区の北側で急激に傾斜する。

検出遺構 弥生時代は後期後半から終末期が主体をなし、主な遺構として竪穴住居6軒、掘立柱建物11棟、溝、土坑、埋没谷がある。12世紀代の土塙墓からは、土師器と共に杏仁形の板状の青銅製品が1点出土した。戦国期の遺構は、調査区西側の南北方向に設置された溝の西側に主に展開し、掘立柱建物2棟が溝に並行して確認できた。

出土遺物 出土遺物は、コンテナケース247箱が出土し、この内、200箱以上は上述の谷部からの出土である。内容は、弥生後期の甕・壺・高环・鉢・器台等の土器類を主体に土製杓子、鉄製鉗、滑石製石鍤、砥石、中世の土師器や土師質土器、瓦質土器、国産陶器、明代青磁等がある。

まとめ 今回の調査では弥生時代後期後半の集落を確認することができた。本調査地点の東側には中期後半から後期前半代の環濠が検出されており、環濠の埋没後に周辺の丘陵部に広く展開していく大規模な集落の一部と考えられる。なお、周辺で多く検出されている同時期の円形周溝は、竪穴住居の外周溝である可能性が高い。

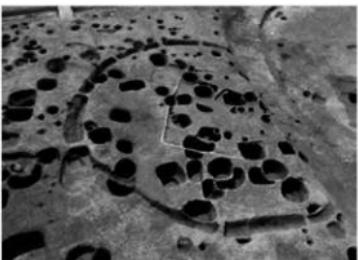
また、戦国期の屋敷地は近年の調査で大塚古墳の周辺に複数存在することが明らかとなっている。方形の区画溝で屋敷の外周を取り囲むことが共通しており、内部の構造や時期変遷等を含めた全容の解明が急がれる。



1. 調査地点の位置 (120萬船寺 625 1:8000)



2. 調査区全景 (東から)



3. 弥生時代後期の竪穴住居と外周溝 (東から)

1122 福岡城跡第66次調査 (FUE-66)

所在地	中央区城内1丁目1	調査面積	54m ²
調査原因	陥没による現状変更	担当者	大庭康時
調査期間	2011.08.10～2011.10.28	処置	現地保存

位置と環境 2008年7月18日平和台陸上競技場スタンドの一部が陥没した。平和台陸上競技場は国史跡福岡城跡の三の丸に含まれるため、暗渠が陥没箇所の復旧に当たって保存対象となるかを判断することを目的とし、文化庁の指示を得て実施したものである。

表土以下は、福岡城築城時の盛土による整地層である。暗渠の掘り方は表土から掘り込まれており、掘削時の作業面はすでに削平され、残っていないかったため、重機を用いて暗渠蓋石検出レベル直上まで掘削し、以下について精査した。

検出遺構 暗渠は、両側壁間の幅92cm、花崗岩の割り石を側壁として、4段以上垂直に積み上げ、花崗岩の蓋石をかぶせたものである。側壁の石積みは、花崗岩を表面長方形で背面に向かったほぼ楔形に削ったものを、面をそろえて積み上げたもので、近世福岡城にかかるものとは異なる。また、裏込め疊の間から煉瓦が出土した。煉瓦には、モルタルが付着しており、煉瓦積みの構造物の一部が投げ込まれたことを示している。また、蓋石の側面にも、セメントの付着が確認できた。

出土遺物 コンテナ1箱分が出土した。

まとめ これまでの鴻臚館跡の発掘調査で、陸軍24歩兵連隊の兵舎には、煉瓦のモルタル積みが見られ、暗渠裏込めから出土した煉瓦がこれに由来するすれば、暗渠の構築は、陸軍以降、昭和23年の平和台陸上競技場建設とともに可能性が高いといえる。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 193 1:8000)



2. 暗渠検出状況（北から）



3. 暗渠壁石積み（西から）

1124 有田遺跡群第240次調査 (ART-240)

所在地 早良区小田部5丁目38-1・-2 調査面積 84m²
 調査原因 分譲宅地造成 担当者 阿部泰之
 調査期間 2011.08.25～2011.09.09 処置 記録保存

調査に至る経緯

福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課（平成23年度当時）は、平成23年6月30日付にて上記地内における埋蔵文化財事前審査願を受理した。土地売買の上宅地として造成する目的での申請であり、同年7月14日に確認調査を実施、遺構が確認された。この成果をもとに申請者と協議した結果、宅地造成によって遺跡が影響を受ける範囲について発掘調査を実施することで合意したものである。

位置と環境

有田遺跡群は早良平野の北部、室見川下流域右岸に位置する。ヤツデ状に開析された台地上に立地する遺跡で、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物がみられる複合遺跡である。今回の調査地は遺跡の北部、北西方向に延びる支尾根上である。現況は畠で、周囲の道路面から1.5m前後高い。

遺構と遺物

1. 掘立柱建物跡 (SB)

① SB04 (Fig.4)

調査区南側にて検出した。南東～北西方向に2間、南西方向に1間以上柱穴が調査区外に延びる側柱建物である。



Fig.1 調査地点の位置 (082 原 0309 1:8000)



Fig.2 調査区位置図 (1:1000)

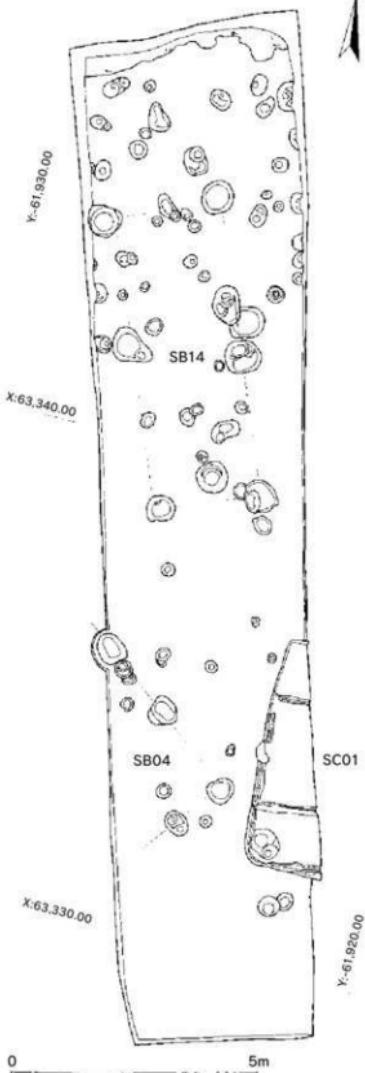


Fig.3 調査区全体図 (1:100)

柱穴は不整円形を呈し深さ30cm前後を測る。埋土は何れの柱穴もよくしまる均一な黒褐色土であり、柱痕跡の検出、埋土の分層はできなかった。柱間は柱穴の中心を結んで1.7~2mを測る。

遺物は、各柱穴から弥生土器が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

② SB14 (Fig.4)

調査区北部にて検出した。概ね南北方向に2間、東西方向に1間の柱筋を持つ建物である。2間×1間の建物は有田遺跡群では例が少なく、調査区外にもう1間分延びて2間×2間の総柱建物となる可能性も多い。柱穴は不整円形を呈し深さ30cm前後を測る。埋土は何れの柱穴もよくしまる均一な黒褐色土であり、柱痕跡の検出、埋土の分層はできなかった。柱間は柱穴の中心を結んで東西方向2.0~2.3m、南北方向3.0~3.3mを測る。

遺物は、各柱穴から弥生土器が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

2. 竪穴住居跡 (SC)

SC01 (Fig.5)

調査区南部にて検出した。大半が東側のり面にかかり、西端部分がかろうじて残存する状況である。概ね整った隅丸方形を呈し、西壁で4.6mを測る。埋土はよくしまる黒褐色粘質土、大きく削平されており床面まで深い部分でも25cm程度の残存状況である。主柱穴・炉跡は検出できなかった。さらに東側にあって、のり面にかかり失われているものと推測される。

ベッド状遺構は南壁・北壁側に対置して構築されており、それぞれ幅1.1m前後、床面から10cm程度の高さを測る。各ベッドと床面の間には幅10~15cmの溝を有する。いずれも床面構築時に盛り土によって構築されているが、北側のベッドの下部は地山ロームを削りだしたものである。

壁溝は、西壁床面および南壁ベッド状遺構上に検出された。幅10~15cm、深さ5cmを測り、明瞭に溝状で連続的である。底面に小ビットは検出され

なかつた。

床面は住居址掘り方にいわゆる「貼り床」をおこない構築している。厚さは10~15cmを測る。土質は黒褐色粘質土・明褐色砂質ローム・八女粘土のブロックを混合したもので、ベッド状遺構もこの土で構築している。

住居址の掘り方底面は北側ベッド状遺構の下部の段を除き概ねフラットで、凹凸は少ない。住居址に先行する遺構も検出できなかつた。

遺物は、床面南側にて弥生土器が2点出土した。北側に拳大の角蹠が4個かたまって出土したが、その機能は不明である。そのほか、弥生土器細片および黒曜石碎片が出土した。

出土遺物 (Fig.6)

何れも弥生土器である。1は大型の甕である。丸底をなす底部の破片で、残存高15.5cmを測る。2は脚付き壺の脚部。概ね完存するが壺部は破片が少なく接合しなかつた。器壁は薄く赤褐色味を帯びる。底径10.8cm、残存高6.7cmを測る。

何れの遺物も胎土は精良で焼成は良好だが、器壁の摩滅が顕著であり、調整等は不明瞭である。

その他の遺物 (Fig.6)

何れも遺構検出面にて採集。3は須恵器蓋である。1/6個体程度残存する破片で口径14.2cmに復元できる。4は砥石の小片。磨製石斧を転用したものか。灰色の緻密な石材で砥面に上下方向の擦痕を有する。

小結

今回の調査地点は、有田遺跡群でも道路からの比高差が大きく、遺構が良好にのこる可能性があったところである。しかし耕作土直下で検出された遺構面のロームは深さ30cm程度で赤褐色の砂質を呈し、大きく削平されていた。

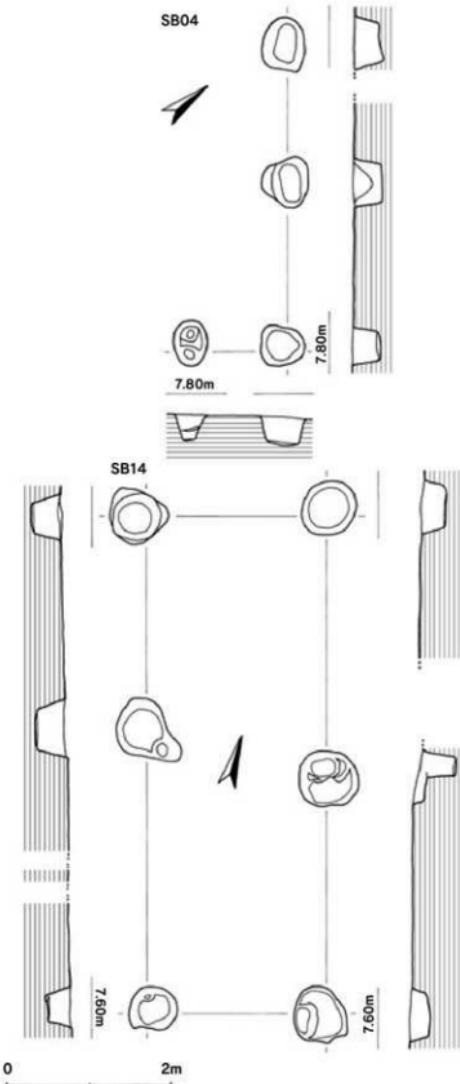


Fig.4 SB04・14実測図 (1: 60)

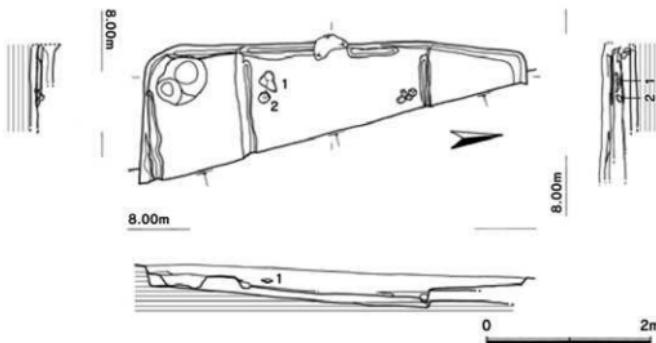


Fig.5 SC01実測図 (1: 60)

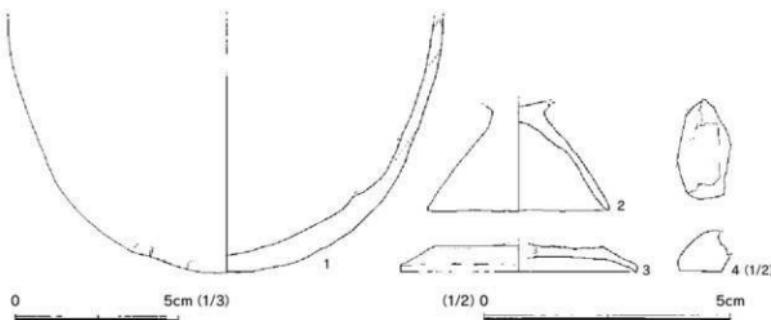


Fig.6 出土遺物実測図 (1: 3, 4のみ1: 2)

確認調査でみられたとおり、調査区北端で地山は崖状となる。これは旧地形の反映ではなく、区画整理時、道路を通すための切り土の痕跡と推測される。同じ部分に若干の遺物を含む黒褐色土が堆積するが、遺構面との境界は明瞭でかつこの部分のロームも削られていることから現況の畑造成時の盛り土と考えられる。

主要な遺構は掘立柱建物跡2棟・竪穴住居1軒である。建物は柱穴の規模・埋土・深さが類似し、不確実ながら時期が近いものと推測される。住居址は大半が失われていたが周壁が残存していた。住居址の時期は周辺の調査例では5世紀を中心とし、今次調査件検出の住居址もこの時期のものか。調査区北部に検出されたピットは断面形などからみてそのほとんどが木の根痕である。

周辺での調査例に比し遺構のこりはよく、区画整理前の状況をわずかに窺うことができた。



1. 調査区全景（北より）



2. SB04 (南より)



3. SB14 (北より)



4. SC01 (西より)



5. SC01 遺物出土状況 (北より)



6. SC01 集石 (西より)

1128 有田遺跡群第241次調査 (ART-241)

所在地	早良区有田1丁目10-11	調査面積	69m ²
調査原因	個人専用住宅建設	担当者	瀧本正志
調査期間	2011.09.15～2011.09.29	処置	記録保存

位置と環境 調査地は遺跡群が立地する洪積台地の南東部斜面中位に位置し、標高10.5mを測る宅地である。1941年作製の地形図では標高11～11.5mを測る丘陵東斜面に位置しており、1966～1968年の土地区画整理事業が大規模であったことを示す。本調査地の東側に連続して接する宅地(182次・190次)の調査では幅2m・深さ2mを測り矩形に配された中世の堀が、また北側(228次)および南側周辺(88・132・137・233次)では古墳時代後期から古代に比定される掘立柱建物や柵列が検出されている。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)

検出遺構 地表下20cmの茶褐色粘質土上面(ローム層)での遺構検出で、縄文時代の小穴、弥生時代の竪穴住居跡1棟、中世の堀、弥生時代～古代の土坑、柱穴、小穴等を確認した。竪穴住居は直径8mが復元される円形住居跡で壁溝が遺るもの、遺構の大半が調査区外に位置するために全容は不明である。堀は182次および190次調査で発見された堀の西側延長部で、南面する堀の全長は50m以上である。



2. I・III区全景 (北から)

出土遺物 遺物は弥生時代後期～中世の弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器がコンテナケース1箱出土している。また堀内埋土からは花崗岩製の五輪塔の一部(風・空輪)が出土している。



3. II区全景 (西から)

1129 有田遺跡群第242次調査 (ART-242)

所在地	早良区有田1丁目25-16	調査面積	44m ²
調査原因	個人専用住宅建設	担当者	阿部泰之
調査期間	2011.10.05～2011.10.14	処置	記録保存

位置と環境 有田遺跡群は、室見川下流域右岸、南北に延びる低丘陵上に位置する。第242次調査地は遺跡の中央部、北方向に延びる小尾根の東斜面上にあたる。試掘結果から遺跡に影響がある範囲のみ調査を実施した。

検出遺構 今回の調査で検出された主な遺構は、溝2条である。その他ビットを検出した。

出土遺物 出土遺物は少量で、溝から弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器細片がコンテナケース1箱出土した。

まとめ 今回の調査で検出した2条の溝のうち1条は等高線に直行する中世のもので、土層は自然堆積の状況を示し、出土遺物から12世紀後半～13世紀にかけ埋没したものと推測される。のこる1条は等高線に並行し、土層からは人為的に埋めた形跡が窺える。遺物に陶磁器が含まれないことから中世の溝に先行するものとみられる。何れの遺構も深さ10～20cmと浅く、遺構面のロームは大きく削平を受けている。ビットは柱穴になるものではなく、木の根痕が大半とみられる。

住居址等は検出されず、今回の調査結果は台地小尾根縁辺部の状況を示すものである。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 全景 (北から)

1130 有田遺跡群第243次調査 (ART-243)

所在地	早良区小田部2丁目191番	調査面積	57m ²
調査原因	個人専用住宅建設	担当者	阿部泰之
調査期間	2011.10.17～2011.10.27	処置	記録保存

位置と環境 有田遺跡群は、室見川下流域右岸、南北に広がる低丘陵上に位置する。第243次調査地は遺跡の中央部、谷に南北を挟まれた小尾根上にあたる。計画建物の基礎が浅いため、遺構面が基礎深さより浅く検出される範囲のみ調査を実施した。遺構は表土直下～-75cm、明褐色ローム土上で検出。調査区中央から東半分は既存建物解体時と思しきかく乱のため、遺構面は20cm以上削られている。

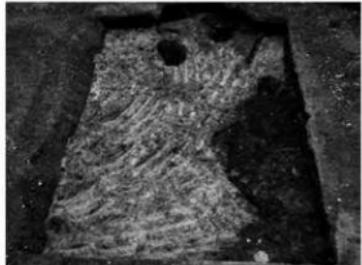
検出遺構 今回の調査で検出された主な遺構は、溝1条・土壙2基・柱穴1基である。その他ピットを検出した。

出土遺物 出土遺物は土壙からのものが主で、その他を含めコンテナケース1箱出土した。

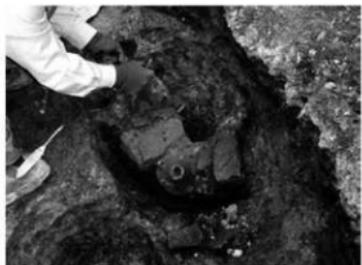
まとめ 今回の調査では溝1条・土壙2基・柱穴1基を検出した。溝は大略南北方向に伸び、深さ10cm程度と浅い。土壙は長径1m・短径40cm前後でうち1基は深さ70cmと深い。出土した甕・高杯は何れも赤焼き土器であり、祭祀土壙の可能性もある。確実な柱穴は1基のみで建物は復元できず、ピットの大半は木の根痕であった。周辺の調査事例と比べても検出された遺構は少なく、宅地とする際に遺構面のロームは大きく削られたものと推測される。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 調査区全景 (西から)



3. 遺物出土状況 (西から)

1133 徳永B遺跡第4次調査 (TOB-4)

所在地 西区大字徳永235番ほか
 調査原因 土地区画整理事業
 調査期間 2011.11.15～2012.08.31

調査面積 2,700m²
 担当者 板倉・井上・福島
 処置 記録保存

位置と環境 徳永B遺跡は、糸島平野と早良平野に挟まれた今宿平野の西端に位置する。調査区を1～3区に分けて調査を行った。1区は高祖山から北に延びる丘陵の南西側斜面、2区は1区北側同一丘陵の東側斜面、3区は1・2区の丘陵から東に下った谷の東側段丘上にあたる。

検出遺構 1区では、南西緩斜面上で中近世の溝・柱穴、近世の耕作土、時期不明の土坑を確認した。2区では、近世～近代の溝・土坑・柱穴・石組・塚跡(一字一石経塚)のほか、円墳2基(石室・周溝)を検出した。古墳1は直径10mほどで、石室は小円礫敷きの床の中央に仕切りの板石を設ける。古墳2は直径8mほどで、幅の狭い竪穴式石室である。3区では、中世～近世の区画溝および掘立柱建物跡が検出された。

出土遺物 遺物は中～近世の土師器・土師質土器、粉青沙器・青磁など陶磁器類のほか、黒曜石片、ガラス容器類、錢貨、瓦片など、コンテナケース25箱分が出土した。古墳からは鉄鋤・大刀・刀子などの鉄器、碧玉・滑石の玉類が出土した。

まとめ 1・2区は本来丘陵上に形成されていた中世集落が、近世以降の開発によって削平され、東西の谷へ向かう緩斜面に遺構が残った状態であった。一字一石経塚があったと伝えられる高まりは、近世の開発時に残丘として残されて祀られたと考えられる。円墳については、5世紀前半の築造と考えられ、鉄器生産に関わる被葬者の性格や、4～6世紀の首長墳(国史跡今宿古墳群)との関連などが重要である。3区南側も1・2区同様、近世以降に削平されているが、北側では15・16世紀～19世紀頃にかけて營まれた集落跡が検出された。

報告書は平成25年度刊行予定である。



1. 調査地点の位置 (120 周船寺 1:8000)



2. 1区全景 (西から)



3. 1区西側 (南東から)

1137 福岡城跡第67次調査 (FUE-67)

所在地	中央区城内1丁目1	調査面積	223m ²
調査原因	石垣補修予備調査(整備)	担当者	常松幹雄
調査期間	2012.01.26～2012.03.16	処置	現地保存

位置と環境 博多湾のほぼ中央部に突き出した福崎丘陵上に立地する。この丘陵は、近世には黒田氏52万石の居城である福岡城が置かれた。調査地は、石垣の裾部と天端にわかれしており、石垣裾部は舞鶴公園の園路となっている。今回の調査目的は、石垣基底部の状況を調査し、石垣保存修復のための所見を得ることである。

検出遺構 福岡城上之橋御門の枠形を構成する北側石垣の西面から南面にかけて幅1.5mのトレーナーを設定し掘削を開始した。石垣の基底部には野面の石材と割石の両方が用いられていた。K区の濠側は裾部に根固めの捨て石が多くみられた。濠に向かつて傾斜している天端面東側の石垣M区の基底部は、南西部は西方向に曲がらないことが明らかになつた。また裾部には野面の石材が多く用いられていた。

石垣の天端面について調査をすすめた結果、石垣内の盛土には東接する土塁と同様の黄褐色の土砂が用いられていることが明らかとなつた。また天端面に近世の建物など遺構の痕跡は認められなかつた。

出土遺物 瓦や陶器などコンテナ60箱分が出土した。

まとめ 今回の調査で、上之橋御門の枠形を構成する石垣の基底部の積石の状況と天端の盛り土の状況を把握することができた。基底部に野面の石材が多く用いられている傾向がうかがえる。また石垣内の盛土は、石垣の東に続く土塁の盛土と土質や色調が類似しており、ほぼ同時期に築造されたと推定される。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 193 1:8000)



2. 調査区全貌 (南東から)



3. 側溝 (南から)

1138 比恵遺跡群第125次調査 (HIE-125)

所在地 博多区博多駅南5丁目110番1 調査面積 995m²
 調査原因 共同住宅建設 担当者 荒牧宏行 松尾奈緒子
 調査期間 2012.01.16～2012.06.26 処置 記録保存

位置と環境 博多湾沿岸に近い洪積台地の北西端に位置する。

検出遺構 検出された遺構は弥生前期の貯蔵穴群、中期の竪穴住居や掘立柱建物群、後期から古墳前期にかけての竪穴住居や井戸がある。

出土遺物 コンテナ103箱が出土した。特筆すべき遺物としては小銅鐸が1点出土した。

まとめ 遺構の密度は極めて高く、調査地点が弥生時代前期から古墳時代前期まで、生活域として継続的に利用されてきたことがうかがえる。

特筆されるのは6世紀代の「那津官家」に関連した3本柱列による外郭施設と内部の大型倉庫群である。これらの遺構は、南側隣地で行われた109次調査で検出された遺構に連続するものと考えられる。また、東側に隣接する国史跡「比恵遺跡」においても、類似する外郭施設と倉庫群が発見されており、関連が注目される。

7世紀代の利用は不明

であるが、8世紀後半近くに略東西に大溝が掘削されている。埋土からは移動式カマドや瓦片を含む遺物が出土したことから、再び官衙や集落として利用されたことが考えられる。



1. 調査地点の位置 (37 東光寺 127 1:8000)



2. 調査区全景 (北東から)



3. 3本柱と総柱建物 (北東から)

1141 福岡城跡第68次調査 (FUE-68)

所在地	中央区城内1丁目1	調査面積	18m ²
調査原因	腰巻石垣修理(整備)	担当者	吉武 学
調査期間	2012.1.16～2012.3.15	処置	現地保存

位置と環境 福岡城跡は、博多湾のほぼ中央部に突き出した丘陵を取り込んだ梯郭式の平山城で、調査地点は三ノ丸北西部の土塁下部の腰巻石垣。

検出遺構 横矢掛け出隅部に築かれた腰巻石垣が崩壊していたため、この積み直し工事に伴い、立会調査を行った。堀（3号濠）の水切り後、原位置を動いている築石を取り外し、裏込めの状況確認を行った。積み直し範囲は東西4.5m、南北3m、高さ最大1.5mで、積み直し後は裏込石を充填し、表面を芝貼りで仕上げた。

出土遺物 明治時代以降の陶磁器類・鉄製品、古代瓦小片、10円玉などコンテナ1箱。

まとめ 崩壊部分には裏込め石が入れられておらず、築石背面は土砂のみで充填されており、この裏込め土から昭和27年の10円玉が出土したことから、近年に積み直し工事を受けたとみられ、これが崩壊をまねいた原因と考えられる。



1. 調査地点の位置 (60舞鶴 193 1:8000)



2. 調査風景 (北から)



3. 掘削完了後 (北西から)

1142 長尾遺跡第3次調査 (NGO-3)

所在地	城南区長尾4丁目67、68	調査面積	163m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	森本幹彦
調査期間	2012.02.01～2012.02.22	処置	記録保存

位置と環境 本調査地点は長尾遺跡の北東部で、丘陵が東に面する樋井川に向かって落ちていく緩傾斜地である。遺構面の標高は9.5m前後で北と東に向かって低くなる。地山は上層から、鳥栖ローム、黄褐色粘質シルト、青灰色シルト～砂礫となっている。

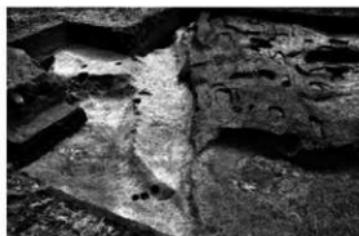
検出遺構 主な遺構は14C後半～15C前半頃の溝（幅約2.5m、深さ50～60cm）とそれに切られる13世紀後半～14世紀前半溝（幅1.5m、深さ50cm）がある。ともに東方へカーブするが、前者は調査区南部で直角に近い角度で折れ曲がっている。前者を切る時期不明の土坑や近世溝がある。古い時期の遺構には弥生時代中期中葉～後葉の溝（幅1m、深さ30cm未溝、底面凸凹）があり、時期不明の小ピットの一部が弥生時代のものであるかもしれない。

出土遺物 遺物はコンテナケース10箱である。13C～15Cの中国陶器、土師質鍋、土師皿、弥生時代中期の土器が主体で、古墳時代中期や古代の土器も少量含まれる。その他には黒曜石剣片や今山の石斧なども出土している。

まとめ 長尾遺跡は調査回数が少なく、今回の調査地点周辺も半径300mほどの範囲は未調査であるので、周辺の様相を知るうえで貴重な調査成果となつた。中世の溝は樋井川を水源とする灌漑用水路とみられ、土坑SK002も水溜状遺構等の生産関連遺構と思われる。弥生時代の遺構は小規模な溝1条のみであるが、弥生土器が多量に出土しており、弥生時代中期全般の時期幅で存続した集落が近辺にあることを予測させる。



1. 調査地点の位置 (63長尾 203 1:8000)



2. II区溝群(北から)



3. I区全景(南から)

1143 東那珂遺跡第7次調査 (HGN-7)

所在地	博多区東那珂1丁目300-1	調査面積	138m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	瀧本正志
調査期間	2012.02.6～2012.2.29	処置	記録保存

位置と環境 調査地は御笠川東岸の低位段丘上に立地する東那珂遺跡の北縁央部に位置し、標高6mを測る水田である。本遺跡に近接する第1次および第5次調査においては、掘立柱建物群、井戸、溝、木棺墓、道路状遺構などからなる奈良時代末～平安時代初頭の集落跡が発見され、併せて「井」が墨書きされた須恵器や綠釉陶器等の同時期の遺物が出土している。

検出遺構 地表下60cmの灰褐色シルト層上面で遺構検出を行った結果、奈良時代末～平安時代初頭頃の集落を確認した。詳細は掘立柱建物3棟、溝、小穴等である。2棟の掘立柱建物は、棟筋を東西に揃え、梁行2間(3.7m)×桁行3間(7.4m)と梁行2間(3.9m)×桁行4間(7.48m)を測る大型建物で、径20cmを測る柱根を残す。

出土遺物 遺物は、土師器、須恵器、土垂等がコンテナ箱に3箱出土している。遺物の主体をなす時代は奈良時代末～平安時代はじめ頃である。

まとめ 今回の調査では、東那珂遺跡の北縁位置を明らかにすると共に奈良時代末～平安時代初頭の集落が全体に展開していることが判明した。周辺の調査を踏まえて検討すると、第1次調査と本調査で検出した掘立柱建物群は、遺物から同時期の所産であり、一体化した大規模集落を構成する一部である。さらに、柱根などから想定するに、建物は集落の中核をなす可能性が高い。

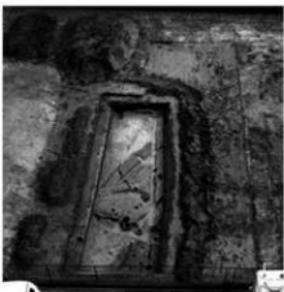
これまで同地域周辺は沖積低地として認識され、集落の存在については理解が浅いものであったが、今後の周辺地域の調査において留意する必要がある。



1. 調査地点の位置 (23雀屋2635 1:8000)



2. I区全景 (東から)



3. 北区 (南から)

1144 席田青木遺跡8次調査 (MAI-8)

所在地	博多区青木1丁目362-1	調査面積	67.5m ²
調査原因	個人専用住宅建設	担当者	加藤良彦
調査期間	2012.02.07～2012.02.08	処置	記録保存

1. 位置と環境

席田青木遺跡は、福岡平野の東部、月隈丘陵の北端付近に位置し、標高5～41mの西側に開けた丘陵尾根上に広がる。弥生時代中期の甕棺墓、後期集落、古墳時代前期集落、横穴式石室古墳、古代～中世後期集落、中世山城等が検出されている。申請地は遺跡の南西端部に位置し、標高7m程の南向き緩斜面に位置する。

2. 調査に至る経緯

今回の調査は平成24年1月17日、個人専用住宅建替えに際して、埋蔵文化財の有無の照会がなされたことにより始まる。埋蔵文化財第1課では、申請地が席田青木遺跡内に位置することと、隣地試掘でGL-10cmの深さで遺構が検出されたことから、試掘を同年1月31日実施した。建築予定地に3本の試掘トレンチを掘削し、結果、表土直下の一部 GL-10cm、大半が-35～-55cmの黄白色八女粘土、淡黄褐色砂質土上面で柱穴を少量検出した。基礎工事が10cm盛土後の-25cmの設計であり遺構も少量であったため、基礎掘削時の工事立会と判断を下した。同年2月7日に工事立会を実施したところ、建設地北東部中央の表土下5～10cmで多くの柱穴が検出され、38cm以上の搅乱土が確認されたため、明らかに掘削が及ぶ北東部中央を対象に急遽調査を実施することとした。周辺、南西部は遺構が遺存するため調査の対象外とした。

3. 遺構

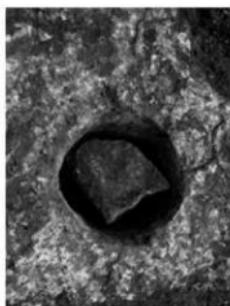
遺構は柱穴のみで、40基ほど検出した。覆土は、大部分灰褐色砂質土で、中世遺物を含む。径20～40cm深さ10～40cm程。SP33(3)では径35cm深さ20cmの柱穴内に、20cm角厚さ7cm程の砂岩割石を根石として据えている。小面積のため建物としてまとまらないが、数棟の掘立柱建物が位置しているものと思われる。出土遺物は量的には弥生・古墳時代土器が多いが、遺構は遺存しておらず、15～16世紀代の切り土で屋敷地として造成した結果と考えられる。



1. 調査地点の位置 (22上臼井 0080 1:8000)



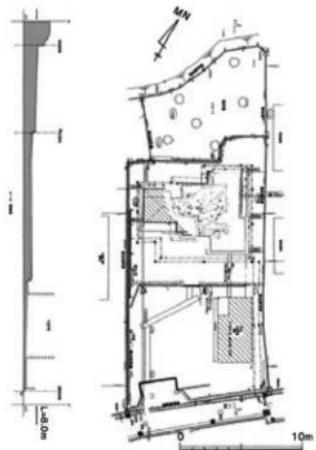
2. 調査区全景 (北から)



3. SP33 根石 (東) から

3. 出土遺物

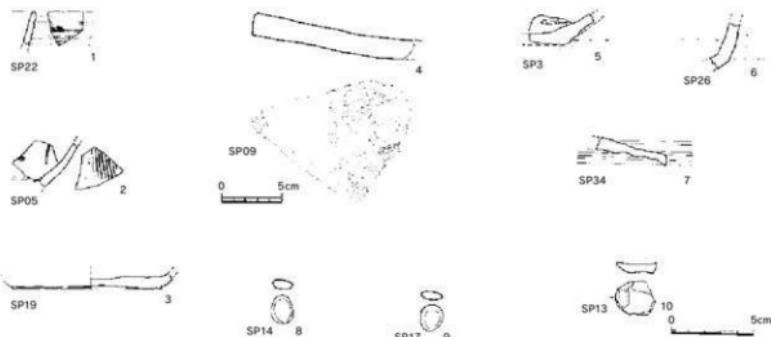
全て柱穴内からの出土。1は明代後期の青磁碗で、口縁外面下に沈線で略化した雷文を施す。2は同安窯系青磁碗。内面にヘラ描きの花文、外面に細かな櫛歛、下半は露胎。3は土師器坏。底径9.2cm。外底回転糸切り。4は一枚造平瓦。黄橙～黒灰色。ナデ・ケンマで端ヘラナデ。山側に板圧痕。5は越州窯系青磁碗。胎土軸は淡オリーブ灰色。内面に胎土目。6は防長系綠釉陶器鉢。内面回転ナデ外面回転ヘラナデ。内外に淡緑灰色の薄い釉を掛ける。胎土淡灰褐色。7は8世紀後半の須恵器坏蓋。8は黒緑色碁石。片岩円礫の下面を平坦に磨る。17×13×6mm・2g。9は黒灰色碁石。頁岩円礫。16×13×5mm・2g。10は土器片円盤。弥生土器蓋を素材。全周を打ち欠きで整形。23×20×6mm・3g。



4. 調査区周辺測量図 (1:400)



5. 調査区全体図 (1:200)



6. 出土遺物実測図 (1:3・4 = 1:4)

1145 野多目C遺跡第5次調査 (NTM-5)

所在地	南区野多目2丁目325-1	調査面積	245m ²
調査原因	共同住宅建設	担当者	佐藤一郎
調査期間	2011.03.02～03.21	処置	記録保存

位置と環境 福岡平野の西辺を北流する那珂川中流域左岸の河岸段丘上に位置する。

検出遺構 古代の溝2条、土坑4基、ピット状遺構2を検出した。溝は緩やかに蛇行し、埋土が褐色灰色粘質土・粗砂で、溝SD01は幅1m、深さ20cmを測り、延長15m検出した。底面両端の比高差は10cm。溝SD01に切られる溝SD02は幅40cm、深さ20cmを測り、延長3m検出した。土坑はA遺跡第1次調査で同様なものが検出されている。埋土は黒色粘質土で、遺物は全く出土していない。形状は円形の竪穴状のものもあるが不整形で底面のしっかりとしたものではない。人為的な遺構とは考えられない。土坑は内1基が溝に切られている。ピット状遺構についても同様な埋土・無遺物であるが、形状は平面が円形・方形、底面は凸レンズ状を呈する。同じ形状の遺構は調査区内では見られず、建物を構成する柱穴とはみなし難い。地山は淡橙色～灰白色粘質土で、標高14m前後を測る。水田として土地利用されていたため、調査区域内では大きな比高差はなかった。

出土遺物 土師器・須恵器片、縄目の叩きが入った瓦片が少量出土した。時期は8世紀前半とみられる。

まとめ 調査地は野多目A遺跡と野多目C遺跡に挟まれた低い位置にあり、遺構は疎らで集落とは言いかねる。溝については水田関連の水路である可能性が強い。



1. 調査地点の位置 (40老司 147 1:8000)



2. I区全景 (南西から)



3. SD01・02 (北西から)

1146 有田遺跡群第244次調査 (ART-244)

所在地	早良区有田1丁目10番5	調査面積	167m ²
調査原因	個人専用住宅建築	担当者	阿部泰之
調査期間	2012.03.01～2012.03.30	処置	記録保存

位置と環境 遺跡群は、室見川下流域右岸、南北に延びる低丘陵上に位置する。第244次調査地は遺跡の東部、北方向に延びる小尾根上にあたる。

検出遺構 今回の調査で検出された主な遺構は、掘立柱建物跡2棟・竪穴住居3軒・溝2条・土壙3基・柱穴多数である。遺構密度は高い。

出土遺物 出土遺物は各遺構から弥生土器・土師器・須恵器・石器がコンテナケース6箱出土した。

まとめ 今回の調査で検出した遺構のうち、特筆すべきものは2棟の掘立柱建物跡である。切りあっており、うち1棟は南北3間・東西1間以上の総柱建物で、調査区の西側に柱筋が延びる。柱はほとんどの柱穴で抜かれているが、掘方から出土した須恵器から7世紀後半以降に構築されたものと推測される。1棟は総柱建物に先行するもので、古代官道とされる2本平行溝と概ね同じ方位をもち、柱穴の掘り方はより大きい。東西に2間以上延びるものである。調査区東側にこの延長は検出できなかったので、東端はおそらく調査区中央の大きな搅乱のなかでおさまり、調査区西側に柱筋が延びてゆくものとみられる。有田遺跡群が乗る丘陵中央部から西側にかけて古代早良郡衙に関連する大型掘立柱建物跡が検出されており、今次調査検出の建物も規模・形状からみて同様のものと考えられる。



1. 調査地点の位置 (82原 309 1:8000)



2. 東半部全景 (北から)



3. 西半部全景 (東から)

1147 香椎E 2次調査 (KSE-2)

所在地 東区香椎2丁目843・869番 調査面積 94.6m²
 調査原因 宅地造成 担当者 藏富士寛 加藤良彦
 調査期間 2012.03.28 ~ 2012.04.04 処置 記録保存

1. 位置と環境

香椎E遺跡は、東の老山から西の博多湾へとのびる丘陵上に存在する遺跡であり、調査地点は遺跡の北側に位置する。

確認調査の結果、表土下約1mのバイラン土上に、部分的にはあるが、遺構が存在することが明らかとなり、遺構が確認できた95m²を対象とし、発掘調査を行った。

2. 遺構

竪穴住居1、掘立柱建物1、ピット群を確認した。

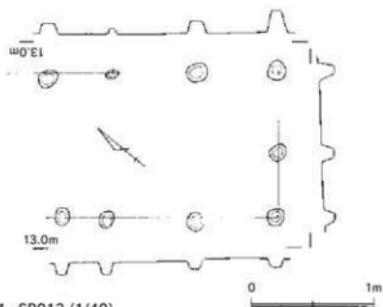
出土遺物より、竪穴住居は古墳時代終末に位置付けることができる。ピット群からは古墳時代および中世の遺物が出土している。柱穴から須恵器が出土しているが、建掘立柱建物自体は中世のものか。

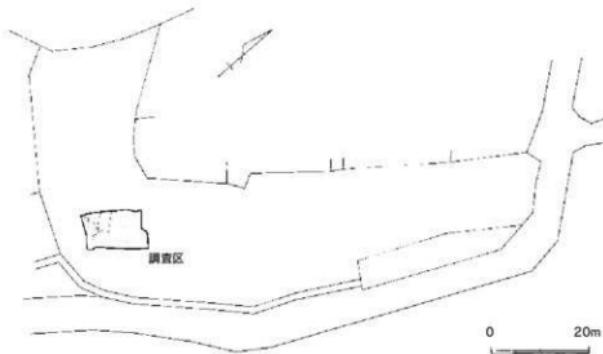
3. 遺物

1・2・4は古墳時代後期後半～終末の須恵器片。3は瓦器碗の口縁部片。

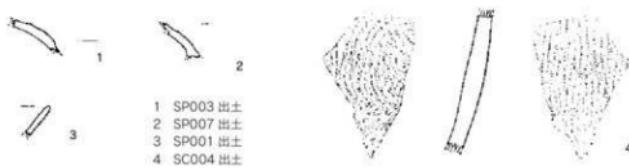
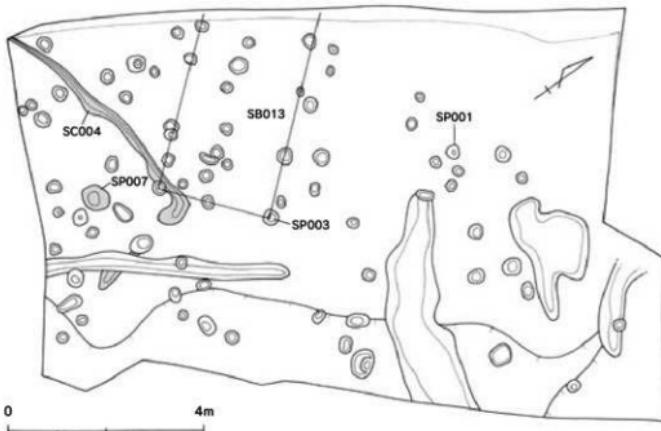
4.まとめ

かなりの削平を受けているが、遺構を確認できた。地山は北へ向かって高くなっている、香椎E遺跡が更に北側へと広がる可能性も考えておくべきだろう。





5. 調査範囲 (1/1000)



7. 出土遺物 (1/3)

0 10cm

7205 諸岡B遺跡第1次調査 (MRB-1)

所在地	博多区諸岡2丁目9-29	調査面積	550m ²
調査原因	店舗建築	担当者	村岡一雄 松村道博
調査期間	1972.10.20～1972.11.20	処置	記録保存

調査の組織

(発掘調査)

福岡市教育委員会文化課	課長 清水義彦	文化財係庶務担当 岩下卓二
		文化財主事 三島格

(整理調査)

整理総括 経済観光文化局	埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗
	第二係長 菅波正人
庶務担当	管理係 古賀とも子
整理補助	埋蔵文化財調査課 撫養久美子

はじめに

昭和47年9月、近くの調査事務所に勤務していた職員らが帰宅の途中、当該地の土取り現場に遭遇した。敷地の北側半分以上は道路と同じ高さに地下げされ、建築工事に着手する寸前であった。廃土の中から甕棺片や陶磁器なども採集され、遺構なども遺存しているようであった。西側の諸岡丘陵は甕棺が確認されていることなどから当該地も埋蔵文化財が包藏され、発掘調査が必要な旨、施主に伝えた。当時は文化財に対する理解が低く、大いに紛糾したが、最終的には施主の理解が得られ、埋蔵文化財の発掘調査中は建設工事を中断することで文化課との協議が整い、発掘調査に着手した。

位置と環境

諸岡B遺跡は福岡平野の東部にあり那珂川と御笠川の中流域に位置する。この中流域には阿蘇山の噴火による火碎流により形成された低平な河岸段丘が展開している。この段丘には多くの遺跡が展開している。中でも奴国王墓とされている須玖岡本遺跡から那珂、比恵遺跡に掛けての遺跡群は奴国中心地と考えられている。今回の調査地点はこの那珂・比恵遺跡の南東1.5kmにあり、高所21.5m前後を測る諸岡丘陵の北東端、標高12.5m前後に位置する。調査地点の南西を南東に走る道路(通称筑紫通り)で第4次～第6次調査地点と分離される。

諸岡B遺跡はこれまで23次の調査が実施され旧石器時代から中世までの遺跡が密集している。諸岡丘陵では第2次～第6次調査で細石器のナイフ型石器、スクレイバー、石核などの文化層、弥生時代の甕棺墓60数基のうち2基からゴホウラ製貝輪が、あるいは集落からは半島系の無文土器も出土している。第12次調査では弥生前期の住居址から無文土器も出土している。第4次調査では丘陵斜面に等間隔に並んで地下式土坑4基が、第20次調査では中世前半期の井戸、溝が見られるなど、中世の遺構も濃密に分布している。



Fig.1 調査区位置図 (24板付 93 1:8000)



Fig.2 遺構全体実測図 (1: 400)

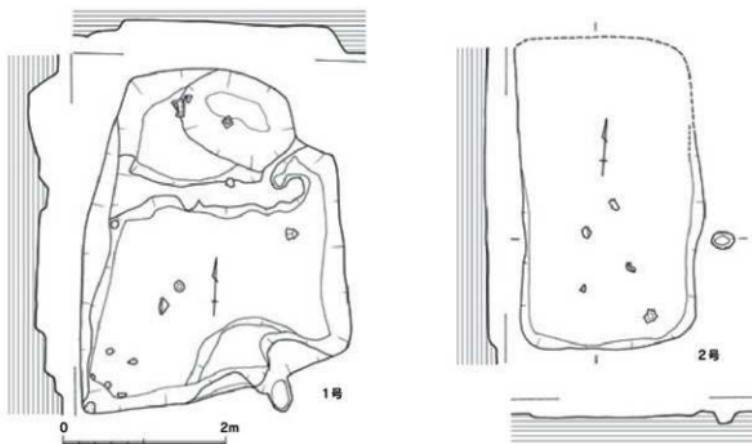


Fig.3 1, 2号竪穴実測図 (1: 60)

検出遺構

今回の調査では中世前期の竪穴遺構2基、中世後期の溝1条、地下式土坑1基、柱穴を調査した。道路側半分以上は土取り工事により失われ、その全体像は明らかではない。

1号竪穴 (Fig.3,4)

調査区中央部に位置する南北にやや長い台形状で、全体に歪な竪穴である。規模は南辺3.25m、西辺4.12m、北辺1.86m、東辺2.36mである。竪穴の平面形は南西隅が鋭角に屈曲し、西壁が湾曲して北壁につながる。北壁は何壁より幅を狭め、段を持って東壁と繋がる。壁面の立ち上がりは全体になだらかであるが、南辺の東寄りの位置では弧状に三段に、西辺は二段となる。床面はほぼ平坦であるが2/3の位置で一段低い壁が立ち上がり、北側の突出部には1.46m×1.04mの土坑状の掘り込みが見られ、その中から砾石、土器が出土している。

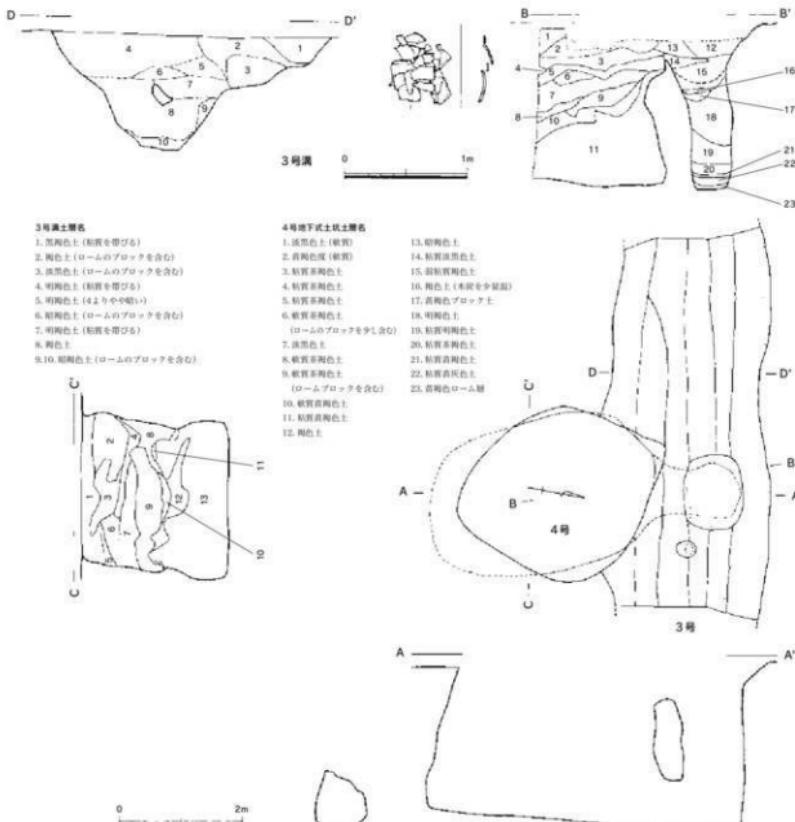


Fig.4 4号地下式土坑、3号溝実測図 (1:80, 1:40)

2号竪穴 (Fig.3)

1号竪穴遺構の南3.0mに位置する南北に細長い隅丸長方形の竪穴である。規模は南北3.8m、東西2.4m、深さ5cm前後を測る。掘り込みが浅く北側は徐々に浅くなり壁面は不明瞭となり、壁面の立ち上がりも確認できなかつたが、破線で示したところまで暗褐色の覆土が広がっていたことから竪穴の規模もその大きさと大差ないものと思われる。床面はほぼ平坦で柱穴も確認できなかつた。東壁に沿って小ビットを1個確認できたが竪穴に伴うかどうか明らかではない。

3号溝 (Fig.4)

2号竪穴の南約3mを東西に直線的に走る溝である。屋敷を囲む溝と推定されるがその性格ばかりか全体の形状さえも確認できなかつた。西側は工事により削平され、東側は宅地造成で大きく削られ、その後壁面は徐々に崩落が進みオーバーハングした崖面となり結局調査できたのは長さ3.2mの長さである。幅2.3~2.6m、深さ1.15~1.41cmを測る。南壁は部分的に中段に平坦面をもち二、三段に掘り込まれ、北壁は壁の途中に変換点をもつ二段の掘り方となる。底面は平坦となり、西から東に緩やかに傾斜している。地下式土坑と重複するが溝の方が新しい。覆土は①黒褐色土で粘質を帯びる。②ロームのブロックを含む褐色土。③ロームのブロックを含む淡黒色土で軟質である。④明褐色土でやや粘質を帯びる。溝の上層を全体的に覆っている。⑤明褐色土で④より少し暗い。

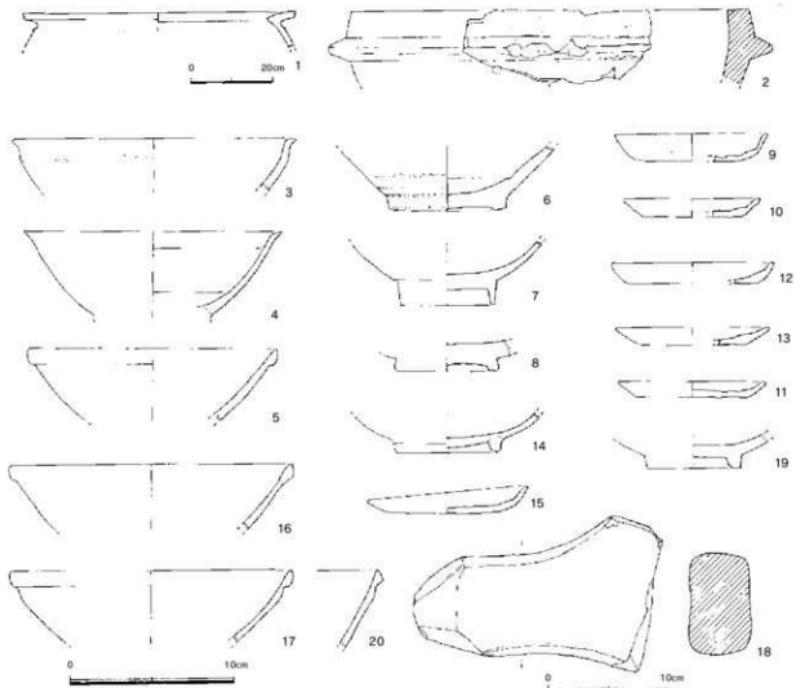


Fig.5 表採、1, 2号竪穴出土遺物実測図 (1:3)

⑥ロームのブロックを含む暗褐色土。⑦ロームのブロックを含む明褐色土。⑧褐色土。⑨⑩はロームのブロックを含む暗褐色土である。今回の調査は溝のほんの一部の調査であり、全体の規模、その目的を理解することは出来ない。

4号地下式土坑 (Fig.4)

3号溝と竪坑、羨道部が重複しほぼ直角に交わり、南側に拡がる。長軸を S -11°- E にとり竪坑とこれに続く短い羨道と主室で構成される。鳥栖ローム層を掘り下げて構築しているが主室のアーチ状の天井部は羨道の一部を除き、大部分は崩落している。床面から 70cm ~ 90cm ほどが本来の形状を保って、床面から内湾して立ち上がる壁面を残存しているところがあり、その表面には掘削時の荒々しい鋸状の工具痕が遺存していた。主室は東西に長い隅丸の羽子板状を呈し、最大長 3.78m、最大幅 2.70m を測る。床面は竪坑の部分が一段掘り窪められ、羨道部が約 5cm 高くなり奥壁に向かい徐々に高さを増す。羨道の入り口は東側が垂直近く立ち上がり、西側は丸く蒲鉾状を呈し、最大幅 84cm、最大高 74cm を測る。

土層をみると主室の床面には腐植土などの間層を挟まず直接に天井部のローム層に覆われ、8、10 層までは天井部、壁面の崩落土である。最上層から瓦質の甕が押しつぶされた状態で出土しているが、これはこの土坑の埋没後の覆土からの掘り込みで時期的に新しい。

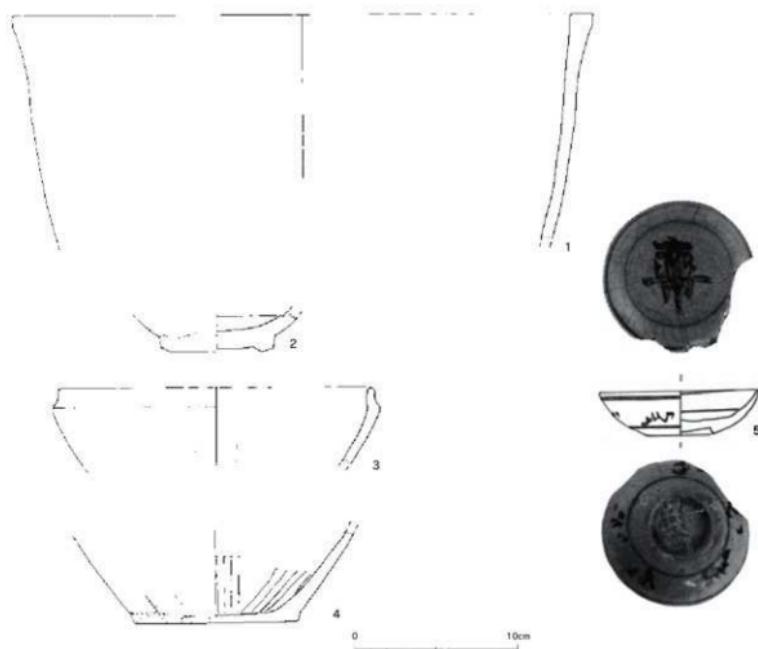


Fig.6 4号地下式土坑、溝出土遺物実測図 (1:3)

出土遺物 (Fig.5,6)

1から12は遺構検出時や工事中の廃土から出土した遺物であるが弥生時代の甕棺破片以外は中世に属するもので検出した遺構に伴うものであろう。1は弥生中期後半の甕棺の口縁部破片である。口径37cmを計り、明褐色を呈する。口縁直下に小さな三角突帯をめぐらす。口縁上面は丸く内面端部は尖り、胴部は丸みをもつと思われる。2は滑石製石鍋の破片である。口径24.6cm、最大厚1.4cmを測る。口縁部はほぼ平らで直下1.6cmに一条の鈎を削りだしている。口縁部と鈎の間は縱方向の削り痕がある。鈎の外縁には抉入が認められ、その下方に小孔を穿ち、二次利用品の未成品の可能性もある。3～7は輸入磁器である。4～7は白磁である。4はV類の碗で底部から高台を欠損する。口縁上面を水平に、緩やかに内湾する环部内面に沈線をめぐらす。胎土は乳白色、釉は濁乳白色を呈する。5,6はIV類の碗である。5は玉縁口縁で外面の下端が無施釉でその他は濁乳白色、胎土は白色、6は底部から环の破片。内面に段を有し底部の作りは低く分厚い。外面体部上半より内面には灰白色の釉を施すが胴部下半部から底部にかけては施釉されない。7はV類の体部下半から底部にかけての破片である。高台は細く高く削り出され、外面は高台脇から底部まで無施釉である。見込みに細かい砂粒が付着。8は龍泉窯系青磁碗の底部破片である。細く低い高台である。釉は鶯色で内面から体部外面、高台疊付の内面まで施有している。胎土は緻密で淡灰色を呈する。9～11は土師器の皿である。9は口径8.5cm、器高1.6cmの皿で器壁は薄い。10,11は口径8.5cm～9.1cm、器高1cm前後を測り、外底部には板状圧痕が残る。12,13は瓦器の皿で暗褐色を呈する。小さな破片で調整不明。

1号堅穴出土遺物 (Fig.5-14～18)

14は土師器の椀で低く直立する高台を貼り付ける。色調は淡褐色である。15は土師器の皿で体部、部はナデ。16,17は口縁部を玉縁にするIV類の白磁碗である。18は砂岩製の砥石である。右側面を欠損する。破損面以外は全面を使用し、特に表、裏面は中央部が窪み、相当使用されたものであろう。

2号堅穴出土遺物 (Fig.5-19, 20)

19は白磁碗の口縁部破片、20は白磁II-1類碗の底部破片である。

3号地下式土坑出土遺物 (Fig.6-1, 2)

1は甕で主室の最上層で出土した。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部に最大径をとり、僅かに胴部はぼぼまる。口縁部は肥厚し外面を面取りしている。口径48cmを測る寸胴の大型の瓦質陶器甕で近世に属するものであろう。2はIV類の白磁碗で胎土は白色で釉は乳白色である。高台脇から底部にかけて露胎である。見込みに段を有し、高台は低く厚ぼったい。

4号溝出土遺物 (Fig.6-3～5)

3、4は陶器の擂鉢である。3は口縁部破片で5は青花皿C群である。口縁部を1/3ほど欠くが全体を窺うことが出来る。口径9.7cm～10cm、器高2.7cmである。全体に淡い青味を帯びた釉を施し、基筒底の外底部は無釉であるが部分的に釉がたれているのが観察できる。内面には見込みに圓線を廻らしその内側文様を描く。「壽」文字の中に仙人を描いている。

おわりに

福岡市域内でこれまでに調査された地下式土坑は63基が調査されている。市域内全体に分布しているが西部地区にはこれまで調査例が少ない。中でも有田遺跡は中世の遺構も多く立地する洪積台地にあり、200箇所以上の調査を実施しているが検出例が無いのもその性格を示唆するものか。樋井川A遺跡では27基もの地下式土坑が調査されているが、出土遺物等から貯蔵庫として機能したとされている。堅坑等の築き方、遺物の出また土状況など本調査例と異なり、遺構の性格も異なるものであろう。

8203 諸岡 A 遺跡第2次調査 (MRA-2)

所在地 博多区諸岡3丁目797
 調査原因 共同住宅建設
 調査期間 1982.04.07～05.10

調査面積 800m²
 担当者 二宮忠治 山崎龍雄
 処置 記録保存

調査概要

立地 (Fig.1)

調査地は那珂・五十川遺跡が所在する低丘陵の東側の微高地上に立地する。標高は11m前後を測る。昭和54年3月～4月にかけて行われた第1次調査では、遺構の残りは余り良くなかったが、古墳時代初め頃の小河川や、溝・土坑・ピットなどが検出されている。

出土遺構 (Fig.2～4)

調査区の基本層位は上から1.耕作土(0.2m)、2.耕作土(0.05m)、3.黒色土(0.2～0.3m)、4.砂礫を含む暗褐色土か黄褐色土(0.1～0.15m)、5.明褐色粘質土(八女粘土か)となり、遺構は深さ0.4～0.5m程の第4層の土層面で確認した。この面には暗渠排水の溝が掘られていた。主な検出遺構は土坑9基で、そのほとんどが風倒木痕な



Fig.1 調査区位置図 (1/8000)

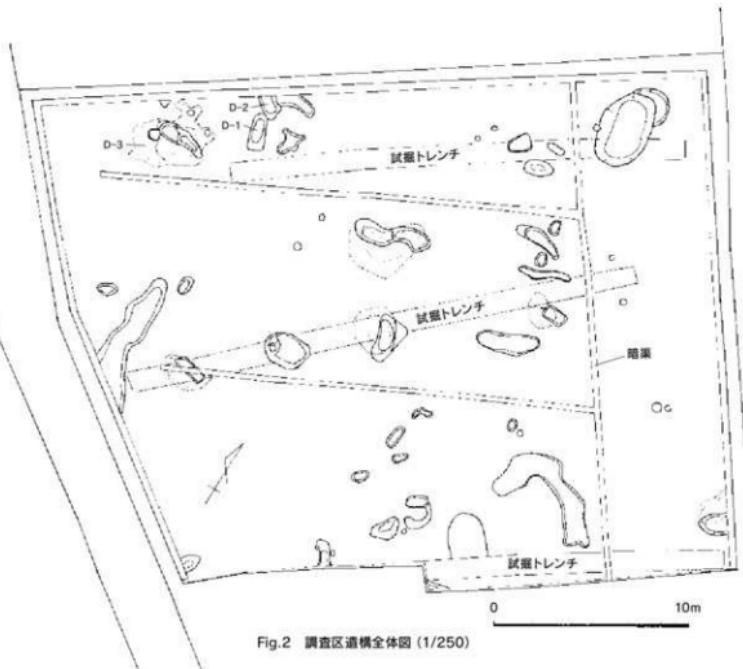


Fig.2 調査区遺構全体図 (1/250)

どの不定形土坑である。この遺構面下に砂礫が入る面があったので、水田面の存在を想定し、掘下げ調査を行ったが、水田畦畔などの遺構は確認出来なかった。

土坑D-1 (Fig.6) は調査区北側で検出した長楕円形状の土坑。規模は長軸1.90m、東西幅0.88m、深さ0.70mを測る。埋土は黒色粘土を主体とする。

出土遺物 (Fig.5) 全体に少なかった。遺物は現在紛失しているが、幸い実測図が残されていたので、それを元に報告する。1は土坑D-1出土の白磁碗口縁部1/12片。復元口径15.7cmを測る。大宰府分類V類の白磁であろう。2は土坑D-3出土の土師器小皿の細片。外底部系切りである。色調は淡赤褐色、胎土は精良。3～6は第III層包含層出土。3は須恵器の蓋小片。口縁部内面にかえりが付く。色調はやや暗い青灰色、胎土は砂粒やや含む。4は須恵器环身細片。色調は青灰色、胎土は砂粒少量含む。5は龍泉窯系青磁の底部1/3片。復元底径5.9cmを測る。高台置付以外オリーブ軸かかる。6は土師器環底部1/6片。復元底径7.4cmを測る。外底部系切りで板目が残る。色調は明赤褐色、胎土は精良。

まとめ

確認した遺構・遺物から古墳時代後期～中世の遺構が一帯に存在すると考える。



Fig.3 調査区下面全景(西から)

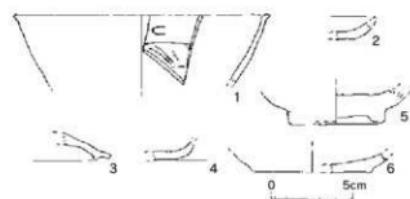


Fig.5 出土遺物(1/3)



Fig.4 北壁土層(1/40)

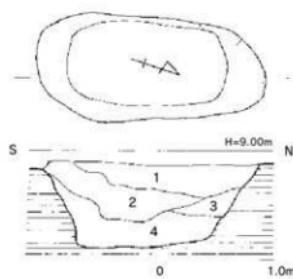


Fig.6 土坑D-1(1/40)

VI 平成23年度福岡市新指定文化財

平成23年度の福岡市新指定文化財は、平成24年2月10日開催の福岡市文化財保護審議会において、8件の文化財について答申を得、平成24年3月19日の福岡市公報により告示された。

[指定文化財の概要]

指定区分	種別	指定名称	員数	所在地	所有者又は保持者
有形文化財	考古資料	飯盛山出土瓦経	151点	福岡市西区 大字飯盛609	宗教法人飯盛神社 代表役員 牛尾 秀司
	考古資料	飯盛山出土瓦経	1点	福岡市早良区 百道浜3-1-1 福岡市博物館	個人蔵
	考古資料	飯盛山出土瓦経	3点	福岡市東区 箱崎6-19-1	国立大学法人九州大学大学院 人文科学研究院 考古学研究室
	考古資料	飯盛山出土瓦経	3点	福岡市東区 箱崎6-10-1	国立大学法人九州大学 総合研究博物館
	考古資料	飯盛山出土瓦経	4点	福岡市西区 大字金武2028-1 (金武小学校)	福岡市
	考古資料	飯盛山出土瓦経	7点	福岡市早良区 百道浜3-1-1 (福岡市博物館)	福岡市
	古文書	小寺文書 附 伝小寺政職所用 三橋藤巴紋背旗 1旒	144点	福岡市中央区	個人蔵
無形文化財	芸能	筑前琵琶	1名	福岡市中央区今川 2-7-62	中村 チエ (芸名 中村旭園)

1. 飯盛山出土瓦経 151点 (有形文化財／考古資料)
2. 飯盛山出土瓦経 1点 (有形文化財／考古資料)
3. 飯盛山出土瓦経 3点 (有形文化財／考古資料)
4. 飯盛山出土瓦経 3点 (有形文化財／考古資料)
5. 飯盛山出土瓦経 4点 (有形文化財／考古資料)
6. 飯盛山出土瓦経 7点 (有形文化財／考古資料)

飯盛山瓦経は、福岡市西区にこんもりとした三角形の山容を見せる飯盛山の山頂から出土した平安時代末期の瓦経である。江戸時代、明治20年前後、明治22年（あるいは24年）、大正13年の数回にわたって出土している。とりわけ大正13年の出土は、飯盛山頂で祈雨祭を挙行した際に出土したもので、7月15日、20日、24日の三日にわたって発掘され、瓦経塚から400点以上が出土したとされる。

大正13年出土時の記録によれば、飯盛山山頂の地盤を約1.2メートル掘り下げ、自然石を積み重ねて直径1メートル

ほどの円形の石室を作った中に、瓦経をぎっしりと縦に積んで納めていた状況が知られる。また、瓦経の周りには木炭を詰め込んでいたとされ、瓦経塚の構造をうかがい知ることができる。

瓦経は、縦22～23cm、横18～19cm、厚さ1.5～1.8cmの粘土板の表裏に天地・行割の罫線を引き、妙法蓮華經、無量義經、觀普賢經、仁王經、阿彌陀經、般若心經を縦17文字、横10行で刻んだものである。願文および小口銘からは往西、慶禪の二名の筆者名を知ることができる。

瓦経の一枚には紀年銘、願文が記されており、永久二年(1114)に造営されたことが明らかである。また、願文には結縁衆として僧俗21名以上の人名が確認できる。の中には、鎌倉時代の史料に在地領主としてあらわれる壬生氏の名も見えている。

しかし、発見当時から散逸が著しく、大正15年時点では完形品71点、破片350枚余が数えられたものの、現時点では完形品11点、破片201点の所在が確認できるに過ぎない。このうち、太宰府天満宮所蔵の7点(ただし明治20年前後に出土したもの)、糸島高校所蔵の4点が福岡県有形文化財に指定されている。

1. の瓦経は、飯盛神社に伝来した147点と、その後山本秀典氏によって山頂から採集され飯盛神社に納められた4点からなる。筑紫史談第33集(大正13年)によれば、「余が登山して実境を踏査せしは発掘約二ヶ月の後、九月十一日なりしが、之れより前、発掘せる経瓦の主なるものは、発掘者其他何人か自宅に持帰り居て、容易に回収し得ず、県庁當局者より再三郡衙等に令して回収中の事なりしが九月に入り、主なるものは漸く回収の報を得たとの事なり(略)、下山して下宮(飯盛神社)に賽し、社務所に就きて回収しある経瓦を見しに、全形のもの七十一個、稍々完全なるもの若干、其の他は大小破片と為りしもの、合せて二百個以上にも達すべし」とあり、また、「史跡名勝天然記念物調査報告書」第2輯(大正15年)では「発見後、経瓦は幾分散逸し、石室も破壊されたるが瓦は再び飯盛神社に収集せられたれば(略)、ほぼ完全なるもの七十一枚破片に属するもの三百五十枚余に及べり」という。

これらの記事から見て、大正13年当時、散逸を危ぶんだ福岡県庁の命で、早良郡が回収作業に当たり、飯盛神社に集められたことがうかがわれる。飯盛神社に伝來した瓦経の破片は、このときに回収されたもの一部と推測される。また、山本秀典氏によって山頂から採集された瓦経片には、伝來の破片と接合できるものが含まれており、また、大正13年以降瓦経の出土は報じられず、現地にも盗掘を受けた形跡等は認められない。したがって、大正13年発掘時に出土した瓦経片の一部が山頂に残ったものと推測できる。瓦経片には妙法蓮華經、無量義經、觀普賢經、仁王經を刻書する。また願文の破片には「壬生真時」の名が刻まれたものがある。

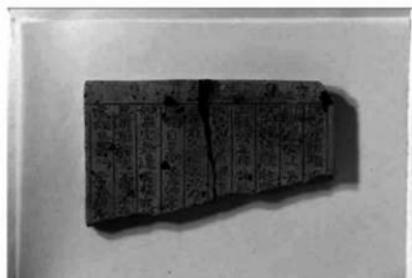
2. の瓦経は郷土史家木下謙太郎氏から所有者に贈られたものである。現在は所有者から福岡市博物館に寄託されている。瓦経片は妙法蓮華經、分別功德品第十七を刻書したもので、二片を接合し、瓦経の上二分の一弱が遺存している。



1. 飯盛山出土瓦経 破片



1. 飯盛山出土瓦経願文破片「壬生真時」銘



2. 飯盛山出土瓦経 破片



3. 飯盛山出土瓦経 破片

3. の瓦経は九州大学考古学研究室の展示ケースに収められているもので、九州大学に収藏された経縁は不明である。瓦経片3点に妙法蓮華経、觀普賢經を刻書する

4. の瓦経は旧制福岡高校教授玉泉大梁氏の蒐集にかかる旧玉泉館考古資料の一部である。玉泉館は昭和5年に歴史地理教室として開館した。昭和24年新制大学制度の施行によって、九州大学第1分校（後の教養部）に移管、展示収蔵施設として機能したが、昭和16年講義棟増築とともに閉鎖された。平成22年、大学移転にともなう六本松キャンパスの廃止により、九州大学箱崎キャンパスの九州大学総合研究博物館に移管されたものである。

瓦経片3点に妙法蓮華経、仁王経を刻書し、それぞれに玉泉館資料番号が白い塗料で書かれている。



4. 飯盛山出土瓦経 破片



5. 飯盛山出土瓦経 破片



6. 飯盛山出土瓦経 破片



飯盛山山頂の景観

5. の瓦経は、福岡市西区金武の福岡市立金武小学校の所蔵品で、小学校玄関に入った正面の展示ケースに周辺の散布地や古墳から出土した石器・須恵器などとともに展示されている。金武小学校に納められた経緯は不明であるが、瓦経が出土した飯盛山は金武小学校の校区であり、地元住民から、送られたものであろう事は容易に推測することができよう。瓦経片4点に妙法蓮華經、仁王經を刻書する。

6. の瓦経は、高野孤鹿氏の収集にかかる高野コレクションの一部として旧福岡市歴史資料館に収蔵されていたもので、平成2年の福岡市立歴史資料館閉館、福岡市博物館の開館に伴って、移管されたものである。瓦経片7点に妙法蓮華經・無量義経を刻書する。

日本では、平安時代後期になると、経典を後世に伝えるため地下に埋納する経塚が盛んに造営された。紙に写経した紙本経を筒型の容器に入れて埋めるのが一般的であるが、紙は朽ちやすいため、瓦経が作られたと考えられる。主として12世紀代に集中し、これまでに全国で36例が知られ、分布の中心は西日本にある。紀年銘を持ち、実年代が明らかなものは全国で9例。また聞き取りあるいは発掘調査等により出土状況が明らかな事例は5例に過ぎない。

このような状況にあって、出土状況が復元でき、願文をともなって制作年代が特定できる飯盛山出土瓦経は、学術的な価値が高く、きわめて貴重な資料といえる。また、願文から在地領主層が経塚造営に深く関わるなど、地域の歴史を考える上でも重要である。一方、大正15年段階で確認できた点数の半ば近くがすでに失われており、地域に潜在する瓦経の掘り起こし、あるいは文化財としての啓発を図る必要がある。

7. 小寺文書 144点 附 伝小寺政職所用三橋藤巴紋背旗 1面

小寺文書は中世播磨国（現在の兵庫県の一部）の有力な在地領主で、江戸時代に入り筑前に下向して福岡藩士となつた小寺氏の嫡流に相伝された古文書である。特に近世福岡藩主となる黒田氏の祖先は16世紀後半に小寺氏の有力家臣として歴史上に名を残し、一時は黒田氏自身も「小寺」の名字を使用する等、黒田氏と小寺氏の縁故は非常に深いものがある。

小寺氏は中世播磨の大名赤松氏から分出した庶家であるとされる。南北朝内乱期、既に小寺氏が赤松氏の重臣として活躍していたことは『太平記』等の記事から確認することができる。応永年間には、室町幕府から播磨・備前・美作（共に現在の岡山県の一部）守護職に補任された赤松氏の下、小寺氏は備前の守護代職を務めた。また、嘉吉の乱（1441）以降断絶していた赤松氏復興の契機となった長禄の変（1458）の主謀者の一人は小寺氏の人物だった。応仁文明の乱（1467～74）以降も赤松氏宿老としての小寺氏の地位は揺るがず、特に15世紀末以降は播磨国飾東郡御着（ごちゃく）（現在の姫路市内）に拠点を置いて赤松氏の領國支配を支えた。しかし一族や家臣との抗争が続く中で赤松氏の地域支配は必ずしも安定せず、16世紀に入ると小寺氏も自立化の方向に進んだと考えられる。

16世紀後期の当主は政職で、その家臣として小寺（黒田）職隆・孝隆（後に孝高、如水）父子の活躍が知られる。小寺政職は、播磨国が畿内の織田氏勢力と中国地方の毛利氏勢力との境目地域となる中、当初織田方に与同するが天正6年（1578）に毛利方へ鞍替えする。『信長公記』や『黒田家譜』の記事を参考とすれば、天正7年9月頃まで小寺氏は毛利方として活動したが、天正8年正月の羽柴秀吉による三木城攻略の前後に本拠御着を失い、播磨国から退転したと考えられる。

政職は天正10年に滞在中の備後国鞆で没した。その嫡子氏職（法名有庵）は黒田氏の庇護を受け、慶長5年（1600）の黒田氏筑前国入部以降は大宰府に居所を与えられた。また慶長8年には「堪忍分」として、御笠郡紫村内に六十石の知行地を与えられた。以後、江戸時代を通じて子孫は福岡藩士として存続し、幕末に至る。明治時代、林学を修めて農商務省に勤務した当主の定職氏は、退職後に福岡の黒田家別邸御用掛を委嘱されている。

古文書は全て未表装の中世・近世・近代文書、冊子類やその他の資料類から成り、総数は144点である。現状、

中心となる中近世文書は木箱二台に収納され、その他の文書は大型の木箱一合（蓋裏に墨書で「明治四十四年五月」とあり）に収められている。中世文書には16世紀段階の小寺氏の政治動向を反映する室町幕府・赤松氏・織田氏・羽柴氏・小早川氏等の発給文書が含まれる。近世文書には歴代福岡藩主の知行充行状や年貢算用状類、また中世文書の写や系図資料等が見られる。また近代文書としては、明治期に農商務省帝室林野管理局に勤務した当主小寺定職氏の職歴に関する一連の資料が残されている。特に中世文書は封紙・札紙等を含めて受給時まま完存するものが複数ある。保存状態は非常に良好で封や折目の形態も詳細に観察することが可能であり、古文書学的観点からも非常に価値が高い。

伝小寺政職所用三橋藤巴紋背旗 1旒は、法量縦96.0cm、横60.0cm（以下、寸法はいずれも平均値、縫い代を含まない）、紋部分は縦50.0cm、横47.0cm、材質は着尺地幅の縮緬地で向かって左から幅40.0cm、20.0cmの生地を二枚接ぐ。また旗上辺七ヶ所と右辺八ヶ所に糸系で、縦10.7cm、横3.0cmの乳を縫い付ける。現状では旗本体は包紙に収められているが、別に三橋藤巴紋を染め出した紺地の麻袋が保管されており、かつてはこれに収納されていた可能性がある。包紙には大正15年（1926）7月13日に小寺定職氏が記した由緒書があり、これによれば、この旗は戦国時代末期の当主小寺政職の所用の背旗として小寺家に伝來した。

旗は生地色の白色のほか、地色のいわゆる柿色と、紋の細部を糸目状に描きだす濃灰色で染められている。柿色を染め出した赤色系染料は紅花が、黄色系染料は黄檗が用いられた可能性がある。染色技法は引染により、また紋部分は別染めで、筒描での糊伏せの後に引染を行い、一旦糊を洗ってから濃灰色の線を入れたと考えられる。三橋藤巴紋の文様は麻袋の文様と比較すると、藤の花房や橋の枝茎の形状が大ぶりで有機的であり、その意匠からは古様な特徴が看取される。一般に縮緬織の技法は天正年間に明國から和泉岸へと伝播したとされている。

小寺文書は、中世部分においては、戦国期、15世紀末から16世紀にかけての播磨国及び畿内地域の政治的状況を考察する上で有益な内容を持つ。特に全ての中世文書が発給当時のまま良好な状態で保管されていることは、



目録No.20 年末詳11月3日黒田信長朱印状(切紙／16.9×49.9)



目録No.21 (天正6年) 10月2日羽柴秀吉知行充行状(折紙／28.2×44.1)



伝小寺政職所用三橋藤巴紋背旗
(96.0×60.0 平均値)

※小寺文書写真は全て
福岡市史編さん室提供

古文書一般としても非常に希少性が高い。また近世・近代部分も福岡藩士の家文書の一例として重要である。総体として、市内所在の武家文書の中では最も充実した内容を持つ文書群の一つとして評価される。また小寺家と福岡藩主黒田家の近世以前の特殊な縁故を踏まえれば、本文書が現在福岡市内に伝来していることも歴史的に非常に意義深く、市文化財に指定してその保護に一層の注意を払う必要がある。また中近世の武家社会において、旗は文書と同様にそれぞれの家の家督を象徴する重要な宝物として取り扱われた。伝小寺政職所用三橋藤巴紋旗もその例に洩れず、歴代の小寺家の人々に大切に守り伝えられてきた重要な文化財であり、文書と併せて永く保存されることが望まれる。

【参考文献】本多博之「小寺家文書について」(『兵庫のしおり』6 2004年)

8. 筑前琵琶 1名(無形文化財／芸能)

筑前琵琶の源流は、近代以前から九州地方で活動を継続してきた盲僧琵琶に求めることができる。荒神祭りの為に村々を渡り歩く盲僧(晴眼の者も多くいた)は地神経・荒神経読経の伴奏として琵琶を用いたほか、人々の求めに応じて軍談や人情噺、滑稽譚を、三味線の代わりに琵琶の演奏と共に語った。これを「くずれ」と呼ぶ。近世前期から当道座の支配に服してきた福岡藩領の盲僧は、18世紀末の天明年間(1781~88)に当道座を脱して天台宗青蓮院門跡の配下に加わることを願い出、それが認められた。博多妙音院(現在の高宮成就院、明治8年(1875)に現地移転)を本寺とする福岡藩領の盲僧組織は、明治維新後の変革を経て、現在の天台宗玄清法流に至っている。明治時代の福岡において、盲僧琵琶の改良を企図した琵琶演奏家の代表として一丸智定の名が挙げられる。そもそも智定の生家は博多赤間町の妙福院という盲僧派の寺院であり、幕末には院主が青蓮院門跡から福岡藩領の盲僧取締頭役に任せられていた。智定も家業を引き継ぎ、明治20年代まで從来通り博多内外の檀家を巡回しては荒神祭りを行う一方で、いわゆる「くずれ」を人々に披露していた。明治20年代に入り、筑前琵琶に先駆けて当時全国的に流行の兆しがあった薩摩琵琶の演奏に感染され、鹿児島に赴いて薩摩琵琶を習得研究、これを手本として従前の筑前地方の「くずれ」に改良を加えることを試みる。これにあたって智定は単に薩摩琵琶のみならず、肥前肥後や対馬の「くずれ」、淨瑠璃・新内・講談その他の俗曲語り物など、広く同時代の芸能を参考としたことが知られる。この筑前琵琶の搖籃期、智定の他に活躍した演奏家として鶴崎賢定や吉田竹子の名を挙げることが出来る。

明治30年代に入り、先に上京した吉田竹子に引き続いで、一丸智定も上京、筑前琵琶は本格的に全国へ紹介されることになる。その後立てとして金子堅太郎やその弟辰三郎、頭山満といった、当時東京で活動する筑前出身の人脈が果たした役割も大きかった。なお明治20年代の末まで、一丸等の演奏する琵琶は「改良琵琶」の名で呼ばれていた。また従来の荒神琵琶、「くずれ」を含む広義の呼称として「筑紫琵琶」という呼称もあった。筑前琵琶の名は明治30年代に東京で紹介される中で、当時流行の薩摩琵琶との差違を明確にする意図もあり使用が始められたと考えられる。仁義忠孝という封建的道徳を称揚する詞章が、日露戦争を迎えた同時代の世相とも相俟って、筑前琵琶は明治末年から大正にかけて最も栄え、いくつもの会派組織が形成された。その代表として一丸智定、改名して橘旭翁を中心として明治44年に結成された日本旭会が挙げられる。旭会は従来の家元制度を範に、琵琶習得者に対する各種の免許制度を整



備し、また芸名として「旭」の字を頭に付した雅号を分け与えた。筑前琵琶は若年女性の稽古事として奨励され、ラジオ放送の開始やレコード盤の流通なども人気拡大に大きく影響した側面がある。戦前の隆盛と比較すると、第二次世界大戦後は徐々に琵琶演奏人口も減少し、現在まで活動を続けている会派は僅かとなった。

演奏には盲僧琵琶以来の四弦五柱、または明治時代に橋旭翁の発案で改良された五弦五柱の琵琶を用いる。楽器は天神部と棹部、胴部の三つに分割される。従前の盲僧琵琶と同様に柱(フレット)は高い形式であり、低柱の楽琵琶、平家琵琶とは異なる。素材は紫檀や梅檀等を用い、柔の木を最良とする。構造は胴(槽)を繰り込み、桐の腹板をはめ込む点に特徴がある。また橋旭翁の着想から、腹板の中央部に「橋」を設け、その中间に槽にまで届く柱が入れられる。この構造物は腹板の振動を抑制し、音色を堅く、張りのあるものにするという効果がある。

また過去の調査では、一部の評価の高い琵琶には胴内下部に円盤様の構造物が取り付けられていることが報告されている。寸法は定形で幅八寸六分、長さ二尺八寸程度。薩摩琵琶と比較すると本体・撥とともにやや小型である。従来の盲僧琵琶の「くずれ」では、語りも朗読的であり、奏法そのものが体系化されていなかったのに対し、筑前琵琶では明治大正期の文筆家により、洗練された美文調の詞章を持つ定形の歌本が数多く作成され、演奏法も整備された。

中村チエ（芸名 中村旭園）氏は大正6年（1917）1月10日に誕生した。生家は博多下祇園町で製麵業を営む。大正12年に御供所尋常小学校入学。同年、「琵琶のばせ」であった父の勧誘もあり、当時旭会を代表する人気演奏家であった高野旭嵐に入門、以後長く旭嵐に師事する。昭和4年筑紫高等女学校に入学。旭会の各種免許を着実に授与され、昭和5年には「四弦教授」、昭和6年には「五弦教授」を、昭和14年には「總伝」を免許される。特に戦後は旭会の中心メンバーとして、筑前琵琶と日本旭会の復興に尽力する。また同じく戦後の玄清法流盲僧琵琶の復活にも、演奏指導者として大きく寄与した。昭和57年に第七回福岡市文化賞受賞。昭和62年に福岡県教育文化功労賞受賞。平成7年に文部大臣より地域文化功労者表彰を受ける。平成9年に勲五等瑞宝章受章。現在は筑前琵琶日本旭会最高顧問・宗範を務める。95歳と現役の筑前琵琶演奏家としては、最も高齢かつ豊富な経験を蓄積され、演奏技術は卓越したものがある。現在も市内外で演奏会その他、多くのイベントに参加され、指導者としても熱意を以て後進の育成に当たられている。

筑前琵琶は前近代の筑前地方で行われた盲僧琵琶、「くずれ」を原型とし、明治時代中期の福岡でそれらが改良され、東京へと紹介されて全国的に流行した芸能である。改良に当たっては第一に詞章の洗練、第二に奏法の体系化に注意が払われた。筑前琵琶には琵琶音楽としての性格と、語り物芸としての性格が合わせ合まれており、芸術上高い価値を持つと共に、本市の音楽芸能や文化風俗の歴史を考える上でも極めて重要な位置づけが与えられる。また筑前琵琶の演奏家として、戦前戦後に渡って長期間第一線に立ち、この芸能の継承保存と発展に尽力されてきた中村氏の功績は顕著なものがある。



報告書抄録

ふりがな 書名	ふくおかしまいぞうぶんかざいねんぽう 福岡市埋蔵文化財年報							
副書名	平成23(2011)年度版							
巻次	26							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	加藤良彦							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	福岡市中央区天神1丁目8-1							
発行年月日	平成25年3月22日							
所取遺跡名	所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
むぎのびーいせき 麦野B遺跡(第5次)	はかたくみなみほんまち 博多区南本町2丁目12-2	40132	49	33-32-46	130-27-41	2011.5.26~ 2011.6.16	86.0	記録保存
あたりせいせき 有田遺跡群(第540次)	さわらくこたべ 早良区小田部5丁目38-1、38-2	40137	309	33-34-9	130-19-58	2011.8.25~ 2011.9.9	84.0	記録保存
むろおかおきいせき 席田青木遺跡(第8次)	はかたくあおき 博多区青木1丁目362-1	40132	80	33-35-27	130-27-13	2012.2.7~ 2012.2.8	67.5	記録保存
かしいいへいせき 香椎E遺跡(第2次)	ひがしきくかしい 東区香椎2丁目843、869	40135	2743	33-39-32	130-27-7	2012.3.28~ 2012.4.4	95.0	記録保存
もろおかげーいせき 諸岡B遺跡(第1次)	はかたくもろおか 博多区諸岡2丁目9-29	40132	93	33-33-33	130-27-0	1972.10.20~ 1972.11.20	550.0	記録保存
もろおかえーいせき 諸岡A遺跡(第2次)	はかたくもろおか 博多区諸岡3丁目797	40132	92	33-33-33	130-26-40	1982.1.4.7~ 1982.5.10	800.0	記録保存

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
麦野B遺跡	集落	古代/中世	溝		集落縁辺部
有田遺跡群	集落	弥生/古墳	竪穴住居+掘立柱建物+柱穴	須恵器+弥生土器+砥石	古墳時代後期竪穴住居
席田青木遺跡	集落	中世	柱穴	磁器+陶器+土師器+須恵器+弥生土器+碁石	根石を持つ柱穴
香椎E遺跡	集落	古墳/中世	竪穴住居+掘立柱建物+柱穴	須恵器+瓦器	古墳時代後期竪穴住居
諸岡B遺跡	居館	中世	溝+土坑+地下式土坑+柱穴	磁器+土師器+瓦器+須恵器+弥生土器+石鍋+砥石	中世居館の溝と地下式土坑
諸岡A遺跡	集落	古墳	溝+土坑+柱穴	磁器+土師器+須恵器	集落縁辺部

福岡市埋蔵文化財年報
Vol.26
— 平成 23 (2011) 年度版 —

発 行 日 平成 25 年 3 月 22 日

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神 1 丁目 8-1

印 刷 未松印刷株式会社
福岡市博多区東郡向2丁目4-36
TEL(092)-411-6131

THE ANNUAL REPORT
OF
THE BURIED CULTURAL RELICS OF FUKUOKA CITY
VOLUME 26



THE BOARDS OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY
MARCH 2013
JAPAN